

日本王代一覽

六

リ 5
5155
6



門 5155
流 卷 6

林董藏書

日本王代一覽卷之六目錄

五葉後醍醐天皇

在位十三年

元應二。元亨三。
正中二。嘉曆三。
元德一。元弘一。

六本葉光嚴院

在位二年

正應二。

七十葉後醍醐重祚

建武二。

八十五葉光明院

在位十二年

自建武四。曆應
四。康成三。貞弘
四。

九十九葉崇光院

在位三年

自貞和五。至觀
應二。

十二十葉後光嚴院

在位二十年

文和四。延文五。
康安一。貞治六。
應安四。

日本王代一覽目錄

百 後圓融院

在位十一年

自應安 其末和
四。康曆二。末德
二。

百 後小松院

在位三十年

自末德二。至德
三。嘉慶二。康應
一。明德四。應永
十九。

百 稱光院

在位十六年

自應永 其
正長 其

日本王代一覽卷之六

九十五代

後醍醐天皇

諱八尊治。後宇多第二ノ子ナリ母ハ

談天門院藤原忠子。花山院内大臣師繼。狼實ハ參

議忠繼力娘ナリ天皇始ハ大宰帥ニ任スル故ニ

帥官ト申ス。花園院即位ノ時武家ノハカシラニニテ

東宮ニ立ラル

文保二年二月即位。歲三十一。二條道平關白タリ

後宇多法皇政務ヲ執行ル。鎌倉ノ將軍ハ守邦親

王ナリ執權ハ比條相模守高時ナリ。三月後二

條院ノ子邦良ヲ東宮ニ立ラル。六月近衛左大

臣經平兼光ス。八月二條公茂内大臣ヲ辞ス。其父

前内大臣實重太政大臣二任ス。洞院前右大臣實
泰左大臣二任ス。花山院大納言家定右大臣二任ス。
一條大納言内經内大臣二任又。十二月。關東ノハカ
ラヒニテ。二條道平關白ヲ止テ。一條内經關白トナリ。
元應元年正月。北條高時修理權太夫二任ス。
四月。家定右大臣ヲ辞ス。六月。關白内經内大臣
ヲ辞ス。大納言源有房内臣二任ス。七月。有房薨
ス。九條大納言房實右大臣二任シ。大納言源通重内
大臣二任ス。八月。西園寺前相國實兼カ娘椿子。
中宮トナル。安野中將藤原公廉カ娘廉子。中宮ニ
從テ入内。天皇此ヲ寵愛。三位局ト号ス。後朱雀后トナ
ル。其外官女多ク。腹々男女ノ皇子多シ。

十月。三條實重太政大臣ヲ辞ス。前内大臣源通雄
太政大臣二任ス。源通重内大臣ヲ辞ス。花山院師
信内大臣二任ス。
二年五月。六波羅ノ北條時敦死ス。七月。九條前
攝政師教薨ス。歲四十八。
元亨元年二月。今出河前右府藤原公顯薨ス。
四月。後宇多法皇大覺寺ノ金堂ヲ建立ス。
五月。大覺寺ニ行幸。六月。鎮西探題北條兼時死ス。
今歲夏太皇。天皇檢非違使。別當藤原經宣ニ命。粟
ヲ出シテ貧民ヲ賑ス。又洛中富人ノタクハタル米
ヲ。ヤスク賣シメテ。飢ヲ救フ。自記録所へ出テ。訟ヲ
決斷ス。十一月。花山院内府師信薨ス。十二月。

北條高時其一族常葉駿河守範貞ヲ六波羅ニ居レ
メ。北條英時ヲ鎮西ノ探題トス。此北高時カ内管
領長崎圓喜老耄ニヨリテ。其職ヲ嫡子高資ニ讓ル。
高資驕テ高時ヲナヒカレロシテ。逆威ヲ振フ

二年正月法皇へ朝覲ノ行幸管絃御遊アリ
五月。奥州安藤五郎及又大郎爭論ノ事アリ。長崎
高資賂ヲ兩方ヨリ取テ。私アルニヨリテ。安藤謀叛
ス。又同比攝州ノ渡邊紀伊ノ安田大和ノ越智ナト
云者。武家ヲノムケリ。承久ヨリ以後百年ヲ一リ。北條
家ノ下知ヲノムク。安藤等ヨリ給ル。天皇本ヨリ武
家ノホレヒニ。ナルヲ憤ル。高時カ酒色ニ耽リ。高資
カ逆威皆人望ニ背ト聞テ。密ニ近臣等ト鎌倉ヲ口

サント謀ル 六月。大納言藤原冬氏内大臣トナル
同月。天皇諸臣ヲ召テ。五經三史ノ論議アリ。此北
後宇多法皇大納言藤原定房ヲ關東へ遣サレ。政ヲ
當今ニ任セラレ。閑居セント仰セラレ。武家別義ナ
クニヨリテ。大覺寺へ隱居セラル 八月。左大臣實
泰内大臣冬氏官ヲ辞ス。九條右府房實左ニ轉シ
今出河大納言藤原兼季右府ニ轉ス。應昌大納言冬
教内府ニ任ス。兼季ハ西園寺實兼カ未子ナリ。其庭ニ
菊アル故ニ菊庭ト号ス。後ニ改テ菊亭ト云ト申シ
傳タリ 同月東福寺ノ師鍊元亨釋書ヲ奉ル。師
鍊ヲ虎関ト號ス 九月。西園寺前相國實兼薨ス。

歲七十四

三年三月。一條内經関白ヲ辞ス。九條房實関白ト
ナル。五月。源通雄太政大臣ヲ辞ス。鷹司前関白
冬平大臣ニ再任

正中元年正月。三條前内府公茂薨ス。歳四十一。三
月。石清水行幸。四月。賀茂行幸。同月。鷹司内府

冬教。左大臣トナル。近衛。大納言經忠。右大臣トナル。
西園寺。大納言實衡。内大臣ニ任ス。五月。近衛前関

白家平薨ス。六月。後宇多法皇崩ス。歳五十八。
八月。北條惟貞。六波羅ヨリ鎌倉ヘ歸ル。

九月。土岐頼貞。多治見國長等。天皇ノ密詔ヲ受テ。
鎌倉ヲテサントスルノ謀。頭ケレ。六波羅ノ範貞軍

兵ヲ遣シテ。頼貞國長ヲ討殺ス。

二年五月。日野中納言資朝。日野右少辨俊基。召捕レ
テ。鎌倉ニ赴ク。此兩人。公天皇ノ近臣ニテ。関東ヲ亡サ

ントスル謀ヲレル故ナリ。七月。萬里小路。大納言宣
房ヲ鎌倉ヘ遣サレ。告文ヲ高時ニ給リ謝セラル。此ニ

ヨリテ。資朝ハ仇渡ヘ流サレ。俊基ハ赦サレテ。帰京朝廷
無事ナリ。八月。禪僧。疎石ヲ南禪寺ノ住持トス。

天皇此ヨリ。禪法ニカタクケリ。十月。前將軍。惟康
親王薨ス。歳六十二。十二月。一條前関白内經薨

ス。歳三十六。芬陀利華院ト号ス。
嘉曆元年三月。東宮邦良薨ス。歳二十四。同月。北條

高時。病氣ニヨリテ。剃髮。崇鑑ト号ス。歳二十四。其弟
左近大夫泰家ニ執權ヲ譲リ。金澤貞顯ト連署セ

レメントス。長崎高資同心セズ。泰家怒テ剃髮。性一号ス。負顯王剃髮ス。北條守時北條維負連署執權レケレトモ高時カ旨ヲ受テ執行ヘリ。七月後伏見上皇ノ子量仁ヲ東宮ニ立ラフル。天皇御子多レトイヘトモ東宮立坊。關東ヨリノハカラヒナレハ御心ニ任セズ。八月金澤負將上洛。六波羅ニ居ルレハラクミリテ鎌倉ヘ歸ル。十一月西園寺内府實衡薨ス。大納言藤原基嗣内大臣ニ任ス。二年正月鷹司閑白冬平薨ス。歳五十五。同月禪僧正澄。元朝ヨリ来朝ス。鎌倉ノ建長寺ニ住持。正澄ハ清拙十リ。二月二條道平閑白ニ再任ス。三月九條ノ房實薨ス。歳三十八。十月北條維負死ス。

三年十月前將軍久明親王薨ス。歳五十五。十二月夫皇ノ子尊雲法親王ヲ天台座主トス。此法親王武勇ヲ好テ密ニ鎌倉ヲ討ヘキ志アリ。太塔宮是十リ。元徳元年六月三條前相國實重薨ス。歳七十一。十二月久我前相國源通雄薨ス。歳七十三。二年正月二條道平閑白ヲ辞ス。近衛右府經忠關白トナル。二月内大臣基嗣右府ニ任ル。久我大納言源長通内大臣トナル。三月長通辞退。洞院大納言公賢内府ニ任ス。同月東大寺興福寺延曆寺行幸。密ニ彼僧徒等ヲ語ヒ武家ヲ討ント謀ル。尊雲法親王其張本タリ。五月僧圓觀文觀忠圓等

召捕ラレテ鎌倉へ下向此等勅ヲ承テ武家ヲ諷
伏スル故ナリ皆遠流セラレ野資朝公佐渡ノ配
所ニ居ケルヲ本間ト云ヘル武士高時ガ命ヲ受テ是
ヲ殺ス資朝カ子阿新ト云ル童本間ヲ殺メ父ノ仇
ヲムクユ 六月北條茂時執權ニ補セラレ時ガ子
也 七月目野俊基再鎌倉へ召寄ラレテ殺サル資
朝俊基兩人殊ニ密謀ノ事ニアヅカル故ナリ

八月近衛經忠關白ヲ辞ス鷹司ノ冬教關白タリ
九月長崎高資逆威ヲ振一甚ニヨリテ高時密ニ高
資ガ一族高頼ニ命メ高資ヲ殺サントス事顯ケル
高頼カヘツテ奥州へ流サレテ高資弥驕ル鎌倉ノ
政表テ人三ナソムク此ヲ聞テ主上又鎌倉ヲハカル

志アリ

元弘元年二月右大臣藤原基嗣左大臣トナル又
我長通右大臣トナル西園寺季衡内府トナル

三月北山行幸花見ノ御遊アリ 八月關東ノ使
節兩人上洛ス主上及尊雲法親王ヲ流サン爲ナリ
主上惧テ密ニ笠置山ニ行幸萬里小路中納言藤
房其餘季房等供奉花山院大納言師賢ハ伴テ天子
ノ子シテ獻山ニ登テ兵ヲ聚ム六波羅ヨリ兵ヲ遣
シ獻山ヲ攻ム此間ニ主上ハ笠置へ入給フ師賢王笠
置へ參ル主上河内國ノ武士楠正成ヲ召テ軍事ヲ
任セラレ正成河内へ歸テ義兵ヲアゲテ赤坂山ニ
籠ル 九月關東ノ大軍笠置ヲ攻破ル主上山ヲ

出テ逃給フ。路次ニテトラハレテ。六波羅へ入タテニツル。又軍兵ヲ發シテ。赤坂城ヲ改正成シ。ハラス拒テ後密ニ城ヲ出テ。金剛山へ隠ル。尊雲八十津河ノ邊ニ隱。藤房季房等ノ近臣皆囚ラル。ノ官尊良以下ノ皇子モ皆生捕トナル。此代年号元應二年。元亨三年。正中二年。嘉曆三年。元德二年。元弘一年。合テ在位十三年。

九十六代

光嚴院 諱ハ量仁。後伏見院第一ノ子ナリ。母ハ廣義門院西園寺左大臣公衡ノ娘ナリ。後醍醐即位ノ時高時カハカラヒニテ。東宮ニ立ラル。元弘元年十月。後醍醐笠置ヨリ六波羅へ入給フ時。

武家ノハカラヒニテ。西園寺大納言公宗ニ談ジテ。量仁即位セラル。後二條院ノ孫邦良ノ子康仁ヲ東宮トス。

正慶元年三月。常葉範貞六波羅ノ職ヲ辞ス。北條越後守仲時北條左近將監時益兩六波羅ニ補セラレテ。上洛ス。仲時ハ北ノ方ニアリ。時益ハ南ノ方ニアリ。範貞鎌倉へ歸ル。同月高時ガ使者長井高冬。上洛シ。兩六波羅相談ニテ。先帝後醍醐隱岐國へ流サシ給フ。一宮尊良親王ハ土佐へ流サシ。妙法院尊澄法親王。讃岐へ流サシ。尊雲ハナタコナタ隱シ。還俗シ。名ヲ護良ト改テ。吉野城ニ籠ル。四月。楠正成又赤坂城ヲ攻取ル。五月。先帝ノ近臣或殺サシ。或ハ流サシ。同月正成天王寺邊ニ出張。六波羅ヨリ隅田

高橋等ヲ遣シ討シム。敗軍シテ歸ル。七月宇都宮公綱六波羅ノ旨ヲ受テ。正成ト合戰。

八月赤松圓心播州荅繩城ヲ構テ。先帝ノ御方トナル。正成千劔破城ヲ築テ楯籠ル。九月高時其一族大佛貞直阿曾特治并ニ階堂道蘊等ヲ大將

ニテ大軍ヲモヨブシテ上洛セシム。十月大納言源通顯内大臣ニ任セラレ。十一月今出河右大臣兼季太政大臣ニ任ス。

二年正月關東ノ大勢相分テ。護良皇子ノ籠レル吉野城正成カ籠レル千劔破城并ニ正成カ家人ノ籠ル赤坂城ヲ攻ム。二月赤坂城攻落サル其次ニ吉野城攻落サル。護良アヤウカリシガ村上義光并

ニ其子義隆フセイテ討死シケル間ニ護良免テ深山ニ隱ル。其後諸方ノ軍兵皆千劔破城ヲ取巻テ攻ム。數十萬ニ及ベリ。正成様ノ奇計ヲ運シテフセ

ク故。寄手多ク討タル新田義貞モ此寄手ノ内ニ加テアリシガ。密ニ護良ト通ジテ。上野國ニ歸テ。義兵

ヲ起サントス。同日赤松圓心攝州摩耶城へ出張シ伊豫國ニテ。玉若得能等義兵ヲ起ス。三月赤松圓心京へ攻上ル。此ニヨリテ。

新帝六波羅へ行幸。兩六波羅屢々赤松ト合戰。此比筑紫ニテ。菊池寂阿少貳如惠大文具簡相謀テ。標題北條英時ヲ攻ントスル所。二人却テ英時ヲ救。故菊池討

レヌ。同日先帝後醍醐密ニ隱岐國ヲ遁出テ。伯耆國へ赴テ。名和長年ヲ頼テ。船上山入

給フ山陽山陰國々ノ武士多ク来テ從フ
同月、叡山ノ衆徒護良ノ旨ニ應ジテ、兵ヲ起シテ京
ヘ攻入ル。六波羅ノ武士ト合戰、山徒敗軍、先帝船、上
ヨリ、千種中將忠顯ニ軍勢ヲ添テ京ヲ攻シ、六波
羅ト合戰、忠顯軍利アラズ。同日、高時其ノ族名
越尾張、守高家ヲ大將トシ、足利治部大輔、高氏ヲ
副將トシテ上洛セシ、長崎圓喜、高氏ヲ疑ケ、高
氏其弟直義カ謀ヲ用テ、誓辭ヲ書テ示スニヨリテ、
高時疑ハス。上洛ノ後、高家ハ赤松ト戰テ討死シ、高氏
ハ先帝御方トナリテ、赤松等ト心ヲ合ス。高氏ニハラ
ク京ヲ避テ丹波ヘ赴ク。近國ノ武士從フ者多シ、即
其勢ヲ離テ、五月七日、忠顯、赤松并護良ノ僚人、法

印良忠等ト謀シ合テ、六波羅ヲ攻破ル。八日、兩六波
羅仲時、時益、新帝并二後、伏見、上皇、花園、上皇ヲ具
シ奉リ。京ヲ出テ關東ヘ赴ク。時益ハ流矢ニ中テ
死ス。江州番馬ニ至ル時、敵已ニ道ヲ遮ニヨリテ、仲
時已下從類皆自害ス。新帝并二兩上皇皆囚テ京
ヘ歸ル。千劍破、寄手モ退テ南都ヘ落行

同月八日、新田義貞、上野國ニテ義兵ヲ起シテ鎌
倉ヲ攻、高時カ弟惠性等ヲシテフセカシム。武藏國ニ
テ數度合戰、關東ノ軍勢皆高時ヲ背キケレハ、惠
性遂ニ敗テ鎌倉ヘ歸ル。義貞ツ、イテ鎌倉ヘ攻入、北
條、守時、北條、基時自害。守時ハ長時カ孫ニテ、赤橋ト
号ス。高氏ノ妻ハ、守時カ妹ナリ。基時ハ六波羅ノ仲

時カ父ナリ。大佛貞直。金澤貞將等所々ニテ討死ス。長崎高重。六圓喜カ孫ナリス。クニタル勇士ニテ度々戦カツキテ自害。高時モ東勝寺ニテ自害。二十二日也。北條茂時ハ執權當職ナルニヨリテ。鎌倉ノ殿中ニテ自害。金澤貞顯入道。常葉範貞等ノ族。城圓明。長崎圓喜等ノ家人皆自害。同日將軍守邦。剃髮年三十三。同七月卒。高時カ嫡子邦時ハ執ハレテ殺サレ。二男時行ハ信濃へ落行。惠性ハ奥州へ落行。同月筑紫ニ軍起テ。探題英時モ少貳大友ニ討レヌ。長門ノ探題北條時直ハ降參シヌ。其外國々ニ居ケル北條ノ一族。或討シ。或遁隠テ亡カ。又高時ハ九歳ニテ家ヲ繼ツ十四歳ニテ執權當職。十一年ニテ剃髮。其

後七年ヲ歴テ滅フ。歳三十一也。治承四年。頼朝鎌倉ニ入レヨリ。今年ニテ。將軍九代。北條執權八代。合テ百五十四年也。此帝在位總三二年。年号正慶

後醍醐

重祚

正慶二年五月六日。波羅攻落サレ

又ル趣。高氏并忠顯圓心等。船ノ上へ注進シケレ。後醍醐即入洛シ給。播州書寫山ニテ。義貞ヨリ高時滅亡ノ事ヲ注進ス。楠正成兵庫ニテ迎タテマツル。六日京著シタマフ。高氏鎮守府將軍ニ補シ。治部卿ニ任シ。從四位下ニ叙ス。直義左馬頭ニ任ス。高氏ハ源義家ヨリ八十代。足利左馬頭義氏カ六代ノ孫ニテ。清和源氏ノ最ナレトモ。累世北條ト内縁ヲ結テ。相親シキ故。所領モ多カリキ。義貞ハ此モ義家ヨリハ

十代新田義重カ七代ノ後ナリ。シカレトモ北條ニ疏セ
ラレケル故。其家微々ナリシカ。今度勢ニ乘レテ。大功ヲ
立タリ。主上既ニ重祚アリテ。鷹司冬教關白ヲ
止ラシメ。今出河兼季太政大臣ヲ止ラシテ。前右大臣
ニ下サレ。其外解官ノ者多シ。右大臣季衡内大臣源
通顯等剃髮スル者モアリ。二條道平左大臣ニ再任シ。
藤氏長者トナル諸事ヲ掌シ。但關白職ヲハラカ
ズ。主上自ラキコレメスヘキニハ。我長通右
大臣ニ再任シ。洞院公賢内大臣ニ再任ス。元弘ノ乱ニ
流サレシ輩皆歸京。同月護良皇子征夷大將
軍ニ任セラレ入洛ス。高氏カ人望アリテ。遂ニ六朝
敵トナルヘキ勢アルヲ知テ。急ニ殺サントス。主上

許容セス。高氏惧テ。護良ノ繼母准后藤廉子ニ賂フ
テ難ヲ免ル。七月。千劍破寄手ノ大將數輩降參
皆誅セラレ。八月。高氏從三位ニ叙シ。武藏守ニ任ス。
尊ノ字ヲ賜テ。高氏ヲ改テ尊氏ト号ス。主上既ニ
公家一統ノ政ヲ施サレ。准后廉子等内竈ノ申ス
ニヨリテ。賞罰正シカラス。天下却テ武家ヲ慕ル中
納言藤房ヨリ。諫シトモ許容ナシ。
十月。北畠參議源顯家陸奥ノ國司ニ任シ。下向ス。出
羽陸奥兩國皆從ヌ。
建武元年正月。尊氏正三位ニ叙セラレ。同月。大内
裏造營ノ事始ナリ。二月。源長通右大臣ヲ辞
ス。近衛經忠右府ニ再任ス。同年春。尊氏ニ武藏

常陸下総ヲ賜ル。義貞ニ。上野播磨ヲ賜ル。直義ニ
遠江ヲ賜ル。義貞弟脇屋義助ニ。駿河ヲ賜フ。嫡子
義顯ニ。越後ヲ賜フ。正成ニ。攝津河内。長年ニ。因幡
伯耆ヲ賜フ。其餘ノ恩賞猶多シ。赤松圓心。獨賞ヲ
賜ラス。コレニヨリテ。朝家ヲ怨奉ル。五月。護良親
王。關東へ流罪。直義此ヲ預テ。鎌倉ニ階堂ノ獄ノ
中ニ捕フ。繼母准后。尊氏兄弟ニ頼シ。諂言セル。ユヘ
ナリ。護良近臣。法印良忠等殺サレ。主上ノハノ宮成
良親王ヲ征夷大將軍トシ。直義ヲ執權トシテ。
相摸守ニ任セラシ。鎌倉ニ居ラシム。七月。紫宸殿
上ニ怪鳥鳴ワタル。隱岐廣有此ヲ射ル。
九月。洞院公賢内大臣ヲ辞ス。吉田大納言定房内

大臣ニ任ス。尊氏參議ニ任ス。十月。鷹司前左大
臣冬教。改テ右大臣ニ任ス。二年二月。三條左府道平。薨ス。歲四十九。鷹司右府
冬教左府ニ任ス。洞院前内府公賢右府ニ任ス。吉田
定房内府ヲ辞ス。一條大納言經通内府ニ任ス。出雲
ノ國ヨリ龍馬進覽。三月。中納言藤房遁世。
西園寺大納言公宗。北條高時カ弟。惠性ト。謀叛ヲ企ツ。
惠性遷俗シテ。時興ト称ス。高時カ子。時行ハ。關東
ニ起リ。其一族名。越時兼ハ。北国ニ起ル。事アラハレニ。
公宗ハ。誅セララル。七月。時行信濃ヨリ起テ。鎌倉
ヲ攻。直義成良親王ヲ具シ奉テ。鎌倉ヲ出。此時使
ヲ遣シテ。護良親王ヲ弒ス。尊氏勅命ヲ奉リ。時行

追討ノ爲ニ東國へ赴ク。或説ニ此時尊ノ字ヲ賜ル
トイヘリ。尊氏遠江ニテ直義カ上ルニ逢テ。同道シ
鎌倉へ赴ク。八月遠江駿河伊豆相摸ノ間ニテ十餘
度戰テ時行破レテ行方レラス。時兼ハ北國ニテ亡ルコ
レヨリ関東ノ武士比自尊氏ニ屬ス。尊氏自ラ征夷
大將軍ト稱ス。年来新田義貞ト功ヲ争テ不和ナ
ルコト。義貞ヲ討ント奏ス。義貞又尊氏カ逆心アルコ
トヲ奏ス。此時直義次ニ護良ヲ殺スコトアラハレシカ
公主上逆鱗アリテ。義貞ヲシテ尊氏ヲ討シム
十一月鷹司冬教左府ヲ辞ス。近衛右府經忠左府
ニ任ス。同月義貞都ヲ出テ東征ス。ノ官尊良親王
東國ノ管領ニ任セラレテ同ク下向セララル。參州矢矧

二月官根竹下ノ合戰ニ公尊氏直義出陣シ
官軍討負テ尊良義貞歸洛セシカ。關東ハ申ニ及ス
北國西國南海處々ノ武士尊氏ニ應スルモノ多シ
延元元年正月尊氏公義大軍ニテ上洛。義貞義助
正成長年等大渡山崎宇治勢多ニテ防トイヘトモ。
大敵勢ニ強キニヨリテ義貞敗軍歸洛シ。主上叡
山へ臨幸。尊氏入洛シ。内裏京中炎上。細川定禪ヲ
三井寺へ遣シ。叡山ヲ攻ントス。同月奥州國司比
島參議源頼家兵ヲ率ヒテ叡山ニ到ル。義貞頼家正
成等三井寺ヲ攻破ル。定禪歸洛。義貞等ノ官軍兩
三度都へ攻入ル。每度利ヲ得テ。尊氏京都ヲ落ケテ

二月、主上、叡山ヨリ還幸、此度モ正成様ノ奇討ヲ
廻シテ功ヲ立タリ。同月、義貞、顯家、正成等、尊氏
ヲ追懸、攝州、豊嶋ニテ合戦。尊氏討負テ筑紫へ落
行、義貞、歸洛、左中將ニ任セラレ、菊池、武俊、九州ノ勢
ヲ催シ、尊氏ヲ攻め、筑前、多々良、濱ニテ合戦。菊池討
負テ、九洲會スニ屬ス。此時、義貞、勾當内侍トイヘル
義女ニ感テ、西國下向延引ノ内ニ赤松圓心ヲ初メ、
西國ノ兵皆尊氏ニナヒケリ。三月、顯家中納言
二昇進シ、鎮守府將軍ニ任セラレ、再、奥州へ下向ス。義
貞、八山、陽山、陰十六ヶ國ノ官領ヲユルサシ。西國へ下向
先、播磨ノ赤松カ城ヲ攻ム。四月、後伏見院崩ス。
年四十九。此院崩御以前ニ、密ニ尊氏ニ院宣ヲ賜ル。

同月、尊氏、直義、大軍ヲ率テ筑紫ヲ出。五月、義貞
退テ兵庫ニ陣ス。正成ニ勅シ、義貞ヲ救シ、正成
籌策ヲ献ストイヘトモ、御許容テキヨリ。兵庫へ赴
キ、義貞ニ加リ、尊氏ト合戦。正成、湊川ニテ討死シ、
義貞、敗北シテ、歸洛、主上又、叡山へ臨幸。尊氏入
洛、花園上皇ヲ東寺へ請ヒテ、持明院方ノ皇統ヲ立
ントス。六月、尊氏、高師重等ヲ遣ヒ、叡山ヲ攻シム。
奇手討負テ、師重生、虜トナル。七月、義貞、數度出
京、合戦ストイヘトモ、每度官軍利アラズ。那知、長年
討死ス。義貞自ラ東寺へ拜寄、尊氏ト禰身シ、勝
負ヲ決セントス。尊氏從ハズ。義貞怒テ山へ歸ル。
八月、光嚴上皇ノ弟、豊仁、會蘇我ハカ、仁三、京輝ニ

テ即位建武年號ヲ用テ近衛左府經忠關白トナル
十月主上後醍醐 東宮恒良親王ヲ義貞ニ附託シ
北國へ赴シム。主上ハ尊氏ニテサムカシ。都へ出タニシケ
ルヲ花山院ニ押籠奉ル。足利高經高師等ノ北
國へ遣シ義貞カ籠レル。越前金崎ノ城ヲ攻シム
十一月尊氏大納言ニ任ス。建武式目十ニテ一條ヲ定
ム。天下又武家ノ代トナレリ。十二月主上後醍醐
潛ニ都ヲ逃出シ。吉野へ遷幸。楠木正成カ子正行
參テ守護シ奉ル。舊臣等來從ヒ奉ル。或説ニ吉野
臨幸ハ今年八月ノコトナリトモイヘリ。コレヨリ吉野
ノ南朝ト号レテ。帝王二人ニシマス

九十七代

光明院

諱ハ豊仁。後伏見ノ第四ノ子ナリ

建武三年八月尊氏ノハカラヒニテ即位ス。此時花園
ヲハ本院ト稱シ。光嚴院ヲハ新院ト稱ス

建武四年南朝後醍醐 三月尊氏ノ諸將軍。金崎城

ヲ攻落ス。義貞義助延元 三月尊氏ノ諸將軍。金崎城

ヲ攻落ス。義貞義助延元 三月尊氏ノ諸將軍。金崎城

義貞カ楠男義輝自害。尊良親王モ自害シタニ。春

官恒良ハ京へ歸ル。其後立義コレヲ害ス。四月近

衛關白經忠南朝へ赴ク。經忠カ從弟前内府基嗣關

白トナル。七月洞院公賢右府ヲ辞ス。一條内府

經通左府ニ任シ。九條大納言道教右府ニ任シ。鷹司大

納言師平内府ニ任ス。八月奥州國司頭家軍ヲ

起シ。十二月鎌倉ヲ攻ム。義貞カ次男義興。是ニ屬

又北條時行モ相加ハル。尊氏ノ長男義詮戰ニケ
テ鎌倉ヲ出奔

曆應元年正月。顯家義興等上洛。路次濃州。吉野原

ニテ。尊氏ノ大將桃井直常等ト合戰ス。同月義

貞義助。柚山ヨリ出テ。越前府ノ城ヲ取ル。足利高

經逃テ。黒丸ノ城ニ入ル。義貞勢ヒ北國ニ振ヒ。京都ヲ

攻ルノ志アリ。二月。顯家吉野ニ赴ク。路次八幡

南都ニテ。高師直桃井直常等ト數度合戰

五月。顯家戰破レテ。泉州安部野ニテ討死ス。年二十

一。顯家カ弟顯信并新田義興八幡ニ籠ル

六月。師直八幡ヲ攻破ル。近衛基嗣。關白ヲ辞ス。一

條。左府經通。關白トナリ。七月。義貞越前ヨリ狀

ヲ獻シ。山へ遣ヒ。山徒ト牒シ。合セ入洛セントス。閏七月

二日。義貞黒丸ノ城ヲ攻テ。流矢ニアタリテ死ス。歳三

十七。義助敗軍ノ勢ヲ集テ。越前ノ府ニ歸ル。義興ハ

東國へ歸リ。顯信ハ奥州へ赴ク。八月。尊氏正二位

ニ叙シ。征夷大將軍ノ宣下アリ。直義從四位上ニ叙

シ。左兵衛督ニ任ス。或説ニハ直義副將軍ノ宣旨ヲ

蒙ルトイヘリ。高武藏守師直。武家ノ執事職ニ任シテ。

其弟師泰ト。皆權威ヲ振ヘリ。尊氏ハ政務ヲミツカラセ

ズ。直義ニ任セテ執行シ。師直兄弟。直義ト睦シカラス。

同月。南朝後醍醐ノ天皇。吉野ニテ崩ス。歳五十一。

重祚以後六年ニ及ヘリ。第七ノ皇子。義良即位。後村

上天皇コシナリ。母ハ准后。廉子。先帝寵愛ノ人ナリ。

北島大納言源親房南帝ノ輔佐タリ。洞院ノ實世
四條ノ隆資諸事ヲ執奏ス。親房ハ顯家ノ父ナリ。博
識才學アリテ。書ヲ多クアラハセリ。其子顯信奥州
國司ニ任セラレ。其次ノ子顯能伊勢國司ニ任セラレ
二年七月脇屋義助北國ノ兵ヲ集メ越前黒丸城
ヲ攻落ス。城主高經加勢ヲ請フ。京都ヨリ大勢發
向レケレハ義助敗レテ。義濃ヘ落行。其ヨリ吉野ヘ參
ル。義助ニクミセシ北國ノ城々皆没落ス。畑時能ト云ル
勇士ワツカ二十七人ニテ。鷹巣城ニコモリシハカリ。
久クヨラエシカ。是モ月ヲ歴テ討レテ。北國平均
十二月。一條經通左大臣ヲ辞ス。九條右府道教己
ニ替ル。鷹鳥司内府師平右府ニ轉ス。大納言源具親内

府ニ任ス。今年南朝改元興國。國七自
三年三月出雲ノ塩治判官高直高師直カ謀リテ
リテ謀セラレ。四月脇屋義助南帝ノ勅ヲウケテ
テ南海ヘ赴キ四國ヲ平ントス。五月義助伊豫ノ
國ニテ病死ス。尊氏ノ大將細川頼春軍ヲ起シ義
助ニ從ル輩ヲ討平ケテ。四國平均。七月源具親
内大臣ヲ辞ス。二條大納言良基内府ニ任ス。
十二月久我前右府源長通太政大臣ニ任ス。今年禪
僧疎石カ勸ニヨリテ。尊氏直義天龍寺ヲ建立ス。
疎石ヲ開山トス。夢窓國師是ナリ。
四年正月二條入道閑白師忠薨ス。歳八十九。良基
ノ曾祖父ナリ。

康永元年正月一條經通関白ヲ辞ス。九條通教関白トナル。二月久我長通太政大臣ヲ辞ス。

九月土岐頼遠光嚴上皇ノ御幸ニ行途テ狼籍ニ及ブ直義怒テ頼遠ヲ誅ス。十一月九條通教関白ヲ辞ス。鷹司右府師平関白トナル。十二月尊氏ノ母藤原清子卒ス。是ハ上杉頼重カ親ナリ。此ヨレニヨリテ上校ノ一族威ヲ振ヘリ。

二年四月洞院前右府藤原公賢左府ニ任ス。二條内府良基右府ニ任ス。三條大納言實忠内府ニ任ス。

三年正月尊氏石清水參詣。九月直義從二位ニ叙ス。貞和元年八月二十九日天龍寺供養尊氏直義參詣夢窓國師尊師タリ。花園上皇光嚴上皇モ。

御幸アルヘキ沙汰アリ。處山門南都ヨリ嘯詭スルニヨリテ。當日ハ延引アリテ。翌日ニ御幸アリ。二年二月鷹司師平関白ヲ辞ス。二條右府良基関白トナル。二月冬信内府ヲ止テ。徳大寺公清内府ニ任ス。六月洞院公賢左府ヲ辞ス。

今年南朝改元正平。三年八月公清内府ヲ辞ス。九月關白良基左大臣ニ任ス。九條經教右府ニ任ス。近衛道嗣内府ニ任ス。

同月三條實忠内府ヲ辞ス。大炊御門冬信内府ニ任ス。同年備前兒嶋ノ三宅高德等義助ガ子義治ヲ取立。潛ニ京ヘ上リ。尊氏直義ヲ夜討ニセントス。事アラハレテ信濃國ヘ逃去ル。

二年二月鷹司師平関白ヲ辞ス。二條右府良基関白トナル。二月冬信内府ヲ止テ。徳大寺公清内府ニ任ス。六月洞院公賢左府ヲ辞ス。

今年南朝改元正平。三年八月公清内府ヲ辞ス。九月關白良基左大臣ニ任ス。九條經教右府ニ任ス。近衛道嗣内府ニ任ス。

同月三條實忠内府ヲ辞ス。大炊御門冬信内府ニ任ス。同年備前兒嶋ノ三宅高德等義助ガ子義治ヲ取立。潛ニ京ヘ上リ。尊氏直義ヲ夜討ニセントス。事アラハレテ信濃國ヘ逃去ル。

二年二月鷹司師平関白ヲ辞ス。二條右府良基関白トナル。二月冬信内府ヲ止テ。徳大寺公清内府ニ任ス。六月洞院公賢左府ヲ辞ス。

今年南朝改元正平。三年八月公清内府ヲ辞ス。九月關白良基左大臣ニ任ス。九條經教右府ニ任ス。近衛道嗣内府ニ任ス。

四年八月楠正行兵ヲ起シテ河内ヨリ攝州へ出張
尊氏ヨリ細川顯氏ヲ遣シテ討シム藤井寺ニテ合
戰顯氏敗軍ス正行潛ニ京へ上リ尊氏直義ノ館
ヲ能ニ攻ケレハ尊氏ハ免レテ江州へ逃行直義ハ兼
テ地道ヲ鑿テヲキケルニ其道ヨリ逃出或説
ハ此時俄ノ事ニテ周章ケレバ尊氏ノ御臺所害セ
ラルト云リ正行河内へ歸ル尊氏直義歸洛

十月洞院公賢太政大臣ニ任ス位次関白左大臣良
基ノ下ニ座ス 同日主上位ヲ御姪興仁ニ譲ル
年號建武一年 曆應四年

康永三年 貞和四年 在位合テ十二年
九十八代

崇光院

諱ハ興仁光嚴院ノ長子ナリ母ハ陽祿
門院藤原秀子三條大納言公秀ガ娘ナリ

貞和四年十月光明院ノ讓リヲウケテ踐祚シテ
フ。歲十五花園法皇ノ御子直仁ヲ東宮ニ立ラル

十一月花園法皇崩ス萩原院トモ申ス 同日尊氏

山名時氏細川顯氏ヲ遣シテ楠正行ヲ討シム住吉

安部野ノ邊ニテ合戦ニ京勢大ニ敗レテ歸ル

十二月武家執事高師直師泰大軍ヲ率テ正行ヲ討

五年正月師直四條繩手ニテ正行ト合戦正行大軍

ヲ打敗リ師直已ニ危カリシカ能防ユヘ正行矢ニシタ

リテ討シヌ歲二十六其弟正時并一族多ク亡ル師

直スミテ吉野へ攻入ル南帝賀名生へ奔ル師直ハ

歸京シ。師泰ハ河内ノ石川河原ニ陣シテ。正行ガ弟正儀ト對陣ス。コレヨリ師直惡逆滯乱ニシテ。赤驕テ尊氏直義ヲモ輕ゼシカハ上杉重能。島山直宗コレヲソ子ミニクシテ。天龍寺ノ僧妙吉ト相カタラヒ。師直ガ惡ヲ直義ニ訴テ誅セントハカル。直義同心ス。尊氏ノ落胤。子ニ直冬トイヘルアリ。尊氏コレヲウトシ。遠サケケルヲ直義取立テ。西國ノ探題トシ。ロカ援トス。八月。直義館ヘ師直ヲ召テ。既ニ誅セントスル時師直サトリテ。私宅ニ取リ。師泰ヲ河内ヨリ呼歸徒黨ヲカタラヒ。直義ヲ攻。直義逃テ尊氏ノ館ニ入ル。師直大軍ヲ催シ。尊氏直義ヲ圍全レヨリテ。直義ハ政務ヲ止ラシ。重能直宗ハ越前ヘ流サシ。遂ニ殺サ

ル。妙吉ハ逐電ストモ云。又殺サレタリトモ云。九月。關白良基左府ヲ辞ス。九條經教左府ニ轉シ。近衛道嗣右府ニ任シ。竹林院公重内府ニ任ス。竹林院ハ西園寺ノ分レナリ。十月。尊氏ノ長男義詮鎌倉ヨリ上洛。直義ニカハリテ政ヲ行フ。師直權ヲ次心ニス。義詮弟基氏ヲ。鎌倉ノ管領トス。高師冬。上杉憲顯。其家老タリ。十二月。直義剃髮シ。惠源ト号ス。歳四十二。初。尊氏鎌倉ヲ出シヨリ。以来護良ヲ害シ。朝敵トナリ。世ヲ奪シ。コト多ハ直義ガ女姦謀ニヨリ。故一其功ニ誇リ。威モ重クシテ。近年尊氏ニ替テ政ヲトシ。壯年スクルマテ子ナカリシカ。四十二餘リ。初テ男子ヲ生リ。コレヨリ師直誅伐ニ事ヨセテ。密ニ世ヲ奪ノ

志モリケルニヤ

觀應元年三月洞院公賢太政大臣ヲ辞ス

同年復直冬筑紫ニ兵ヲ起ス石見國ノ土三角入

道國中ヲ平テ直冬ニ應ス六月三角退治ノタメ

ニ師泰石見ヘ發向ス八月義詮參議ニ任シ左中

將ヲ兼ラル十月直冬誅伐ノタメニ尊氏并師直

西國ヘ赴ク義詮京ノ警固タリ直義入道惠源密ニ

京ヲ出十二月吉野ヘ降參ス十八大將ノ宣旨ヲ

タニワル

二年正月惠源南方ノ軍兵ヲ催シ京ヲ攻ントス桃

井直常コレニ應ジテ北國ヨリ攻上ル義詮都ヲ落直

常入洛コレヲ聞テ尊氏并師直歸京直常ト合戰直

常敗軍シカレドモ人皆師直ヲ惡テ惠源ニ從フニ尊

氏師直ハ又西國ヘ落行義詮ハ丹波ヘ落行直常又入

洛二月師泰石見ヨリ歸テ尊氏師直ト播洲ニ

參會シ一ツニナリテ兵ヲ集メ攝洲光明寺小清

水所々ニテ惠源ト合戰每度尊氏討負シカ公松

岡城ニ籠リ既ニ自害セントス此時惠源ト和睦ノ

儀調リテ尊氏惠源義詮皆歸洛ス師直師泰

ハ剃髮シテ降參シケルヲ路次ニテ二人共ニ打殺ス

其一族皆所々ニテ殺サル高師冬モ關東ニテ殺サル

四月竹林院公重内府ヲ辞ス六月花山院大納

言藤原長定内府ニ任ス七月尊氏惠源再不和十

リ惠源北國ヘ赴ク九月尊氏北國ヘ赴カントス

惠源北國ヨリ關東へ赴キ。鎌倉へ入ル。十月。尊氏
關東へ進發ス。義詮都ノ守護タリ。十一月。尊氏
駿州薩埴山ニ陣ス。惠源關東ノ大軍ヲ催シ。尊氏
ヲ囲ム。十二月。宇都宮公細薬師寺公義等。尊氏
ニ應ジテ。薩埴山ノ後攻シケルニヨリテ。惠源大ニ
敗レテ。尊氏へ降參ス。尊氏コレヲ携テ。鎌倉へ入ル。
幾程ナク。惠源ハ病死セリ。或ハ毒ヲス、メテ害セ
ラル、トモイヘリ。此間京都兵スクナクシテ危カリ
ケルニヨリテ。義詮南帝ト和睦。南帝イツハリテ
許容ス。コレニヨリテ。觀應二年ヲ改テ。南朝ノ年号
正平六年ヲ用子。二條。關白良基ヲ初トシテ。百官
皆吉野へ參ル。吉野伺候ノ輩皆官位昇進。北畠大
納言源親房准后ノ宣旨ヲ蒙ル。南帝ノ勅ニテ。勲
功アルユヘナリ。翌年二月。南帝吉野ヲ出住。吉天王
寺へ行幸。伊勢國司源顯能。兵ヲ率テ參。偃即ハ幡
へ行幸。顯能并楠正儀等ヲシテ。俄ニ京ヲ攻シ。義
詮江州へ落行。細川頼春討死ス。顯能勅ヲウケテ
上洛シ。持明院殿へ參リ。本院光嚴 新院光明 主上崇
光東宮直仁ヲ車ニ載奉リ。吉野ノ奥賀名生ニ押
籠奉ル。主上在位。統三年ニテ。トラハレタマヒシ
カハ平安城ニ主ナクシテ。荒廢ノ地トナレリ。
兵亂ウキツ、キケルユヘニ。御禊大會モ行ハ
ス。此比關東ニ故義貞ノ家嫡。左少將義宗。其庶兄
義興并義助カ子。義治。義兵ヲ起シ。尊氏ト武藏野

三ノ合戰。此戰ニ石堂入道密ニ新田ト通シ。尊氏ヲ
討ント謀ル。其子右馬助同心セス。故ニ石堂恐テ新
田方ヘ加ル。義興義治ハ鎌倉ヘ攻メテ。基氏ヲ攻ケ
シ。基氏出奔ス。其後笛吹峠ニテ。尊氏義宗合戰
シ。義宗打負テ越後ヘ赴ク。尊氏又鎌倉ヲ攻ケシ。
義興義治退テ河村城ニ籠ル。 三月。義詮勢ヲ催
シ上洛。八幡ヲ攻テ度々合戰。 五月。南方ノ官軍
敗レテ。南帝八幡ヲ落テ吉野ヘ帰ル。

九十九代

後光嚴院 諱ハ彌仁。崇光院同腹ノ弟ナリ。崇光
院ハ南方ヘトラハシ。南帝モ八幡ヲサリテ吉野ヘ
還幸ニヨリテ。義詮ノハカラヒニテ。觀應三年八月。彌

仁即位シタマフ。時十五歳ナリ。三種神器モ皆南
方ヘ渡シヌシ。即位如何ト申輩アリトイヘトモ。武家強
テ申行ヘリ。或説ニ公ニ條。関白良基申サシケル。公寶劔ニ
公尊氏ヲ用ヒラルベシ。神璽ニ公良基ヲ用ヒラルヘシ
ト云。踐祚アリケルト云リ。 九月。文和ト改元ス
十一月。主上ノ外祖大納言公秀内大臣ニ任ス
文和二年。山名時氏。其子師氏。謀叛シテ南朝方ト
ナルコト。去年八幡ノ合戰ニ師氏軍功アルニヨリテ。義
詮ニ出頭シケル。佐々木道譽ヲ頼テ賞ヲ望ム。道譽
驕テ師氏ニ對面セス。故ニ師氏怒テ本國伯耆ヘ帰
リ。時氏ヲスメテ軍ヲ起セリ。 五月。伯耆ヲ出テ。
六月。吉野官軍ト牒シ合セテ都ヘ攻上ル。義詮敗軍

シ。主上ヲ伴ヒ奉リ坂本へ落行其ヨリ東國へ行幸敵
追來リケレハ路次ニテ道譽カ子秀綱討死主上ヲハ細
川清氏皆ニ負奉リケルトナシ義濃、畠井ニ暫皇居ヲ
定メテ義詮守護ニ奉ル諸國ノ勢ヲ集テ山名ヲ討
ス山名父子勢ツキテ伯耆へ歸ル義詮主上ヲ守
護シテ都へ還幸アリ

三年春新田義興脇屋義治河村城ヲ出奔シ東國
シツマリケレハ尊氏自山國清ヲ基氏ノ家老トシテ
關東ヲ守シメテ尊氏ハ歸洛ス仁木左京大夫頼章
ヲ武家ノ執事職ニ任ス義詮ヲシテ幡磨ニ赴シメ勢
ヲ催シ山名ヲ討シム山名コレヲ聞テ直冬ヲムカヘテ大
將トスコレヨリテ直冬南帝ノ方トナリテ尊氏ト

父子ノ合戰初ル越前ノ足利高經越中ノ桃井直
常モ尊氏ニ怨アルニヨリテ直冬ニ屬シ北國ヨリ京
ヲ攻ント約ス十二月山名時氏伯洲ヲ發ス

四年正月尊氏主上ヲ伴ヒ奉リ江州へ落行直冬
并時氏高經直常入洛二月尊氏東國ノ兵ヲ
催シ東坂本ニ陣ス義詮ハ西國ノ勢ヲ催シ神南ニ陣
ス時氏師氏神南ヲ攻ム細川頼之赤松則祐佐々木
道譽等ヨリ防ケレハ師氏疵ヲ蒙テ敗軍ス直冬以
下東寺ノ城ニ籠ルニヨリ尊氏直冬洛中東寺ニテ
合戰數度ニ及フ仁木細川玉岐佐々木赤松等前後
尊氏ニ貳心ナクシテ軍功アリ三月南方ノ兵糧
少キニヨリテ直冬時氏高經直常皆其本國へワカシ

去ル尊氏義詮帰洛ス。其後高經ハ義詮ノ招ニヨリ
テ武家へ歸參ス

延文元年七月久我大納言源通相内大臣ニ任ス
八月義詮從三位ニ叙ス

二年二月光嚴法皇光明院崇光院吉野ノ奥山ヨリ
ユルサレテ歸京シタマフ

三年二月直義ニ從二位ヲ贈ラル 四月二十九日
征夷大將軍正二位大納言源尊氏逝去。年五十四。
從一位左大臣ヲ贈ラル。等持院殿仁山ト号ス。鎌
倉ニテハ長壽寺殿ト称ス。建武二年ヨリ延文三年
ニテ治世二十三年。宰相中將義詮其跡ヲ繼テ武將
トナル。十月鎌倉管領基氏其家老畠山國清入

道道皆トガリテ。江戸遠江守同下野守竹澤右京
亮ヲ遣シテ。新田義興ヲタハカリテ。武藏矢口渡ニテ
コレヲ殺ス。其外新田ノ一族所々ニテリケルヲモ。基氏尋出
シテコレヲ平ク。基氏鎌倉ニ居スレテ。武藏入間川ニ陣
取テ。武備嚴重ナルニヨリテ。東國無事ナリ。十一月
菊池武光公元來南朝ノ方ニテ。肥後國ニ住シ。年々小
貳大友等ト合戰。尊氏ヨリヲカレタル探題ヲモ攻破ル。
此年又尊氏逝去ヲ聞テ。九州處々ニテ。合戰數度ニ
及テ。菊池勝利ヲ得タリ。コレヨリサキ。南朝ノ宮ヲ一人
申下シ。征西將軍ト仰ク。新田一族其外諸國ノ兵ヲ
紫ニ行テ。菊池ヲ頼者多シ。九州ハ大半菊池ニシヒケ
リ。十二月義詮征夷大將軍ニ任ス。日野左中辨時

光初使タリ。佐々木道詮嫡孫秀詮其宣旨ヲ請取。
同日。二條良基関白ヲ辞ス。九條經教関白トナル。
四年二月義詮武藏守シ兼。十月武家執事仁木
頼章死ス。細川相模守清氏執事トナル。十一月畠
山道詮基氏ノ名代トシテ。関東ノ大軍ヲ催シ上洛
シ。義詮ニ謁シテ。南帝ヲ攻メトラスム。十二月義
詮及道詮數十萬ノ勢ニテ。南方へ發向ス。楠正儀和
田正武コレヲ防ク。

五年二月ヨリ。京勢關東勢。南方ノ兵ト。龍門山銀嵩
龍泉平岩等ノ所々ニテ合戦シ。五月赤坂城ヲ攻
落ス。南帝ノ皇居ハ觀心寺ト云ル深山ナレハ敵寄来
ルコトアタハス。和田楠モ金剛山ノ奥へカクレケレバ。義詮

并道詮歸洛。此時仁木義長ト云モノアリ。頼章カ弟也。
尊氏ノ時ヨリ軍功アルヨリテ。甚驕リケルユ。道詮清
氏等ト不和ナリ。道詮言南方退治ニコトヨセテ。義長ヲ
亡サントヘ。七月南方ノ軍兵又蜂起ス。道詮清氏
等是ヲ討ントテ。天王寺ニ出張シ。勢ヲ集テ。義長ノ
攻ントス。義長急キ兵ヲ率テ。義詮ノ館へ来テ。強テ道
詮清氏追討ノ御教書ヲ申給リ。執事職ニ任セラル。
佐々木道詮言カ謀ニテ。義詮女ノ姿ニ變シテ。館ヲ出
テ西山ノ谷ノ堂へ落行コレヲキ、テ義長ニ從フモノ皆
退散ス。義長モ勢ヲツキテ。伊勢へ落行。義詮歸洛。道詮
清氏等モ歸京ス。南方又蜂起。畠山道詮功ナキニト
ラ耻テ。八月潜ニ關東へ歸ル。九月關白經教左

府ヲ辞ス近衛右府道嗣左府ニ任ス鷹司大納言冬
通右府ニ任ス源通相内府ヲ辞ス三條大納言公忠内
府ニ任ス

康安元年六月雪降ル其外火災地震等アリ

七月山名時氏伯耆ヨリ美作へ出張シ赤松ト合戦
ス九月楠正儀接津へ出張シ佐々木秀詮ヲ討
殺ス筑紫ニ菊地又起テ小貳大友等ヲ打敗ル
同月細川清氏ト佐々木道誉ト權ヲ争テ不和ナ
リ義詮道譽方中ストコロヲ信シテ清氏叛逆ニ寇ラ
レテ清氏都ヲ落テ若狹へ赴ク十月足利氏
頼等ヲシテ清氏ヲ攻レム清氏南朝へ降参ス即大
將ノ旨旨ヲ蒙ル十一月關東ニテ諸士千餘人言

合せ畠山道誓方罪惡ヲ訴フ基氏畠山ヲ譴責ス

畠山謀叛シテ伊豆ノ修禪寺ニ籠ル同月九條

經教關白ヲ辞ス近衛道嗣關白トナル十二月細

川清氏楠正儀等都へ攻入ル義詮主上ヲ守護シテ

江州へ落行清氏等入洛義詮ノ嫡子義滿ワツカ

四歳ナリシヲ禪僧蘭洲コレヲ隠シテ播州赤松則

祐ニ預ケ申ス義詮諸國ノ兵ヲ呼集ケレハ清氏ハ南

方へ歸ル義詮歸洛

貞治元年正月細川清氏は阿波國へ赴ク四國ヲ討從

ヘシタメナリ義滿播州ヨリ歸洛義詮足利氏頼ヲ

執事トセントス其父高經入道道朝同心セズヨリ

テ道朝カ赤子義將執事トス年猶ワカキユ道朝諸

事ヲトリ行ス氏頼ハ遁世ス道朝ガ家号ヲ斯波ト云
其子孫兵衛ニ任スルニ武衛ト称ス 四月主上江
州ヨリ京へ選幸アリ 六月直冬并山名時氏等中
國ニ出張ス 七月細川右馬頭頼之讚岐國ニテ細川
清氏ト合戦清氏討シテ四國悉ク頼之ニ從フ
九月道朝ガ次男氏經九州ノ探題ニ任セラレテ下向ス
菊地武光是ヲ打敗ル氏經剃髮歸洛 十月関白
道嗣左府ヲ辞ス鷹島司冬道左府ニ轉ス久我前内府
源通相右大臣ニ任ス 十二月三條公忠内大臣ヲ
辞ス

二年正月義詮大納言ニ任ス 三月洞院大納言藤
原實復内大臣ニ任ス 六月道嗣関白ヲ辞ス三條良
基関白ニ再任ス 七月義詮從二位ニ叙ス

三年二月實復内大臣ヲ辞ス西園寺大納言實俊
内府ニ任ス 同年春周防大内又武家へ降参シテ
上洛山名時氏父子モ降参ス因幡伯耆丹波丹後
美作五ヶ國ノ守護ヲ武家ヨリ授ラル仁木義長モ
勢ツキテ降参ス畠山道行ハ關東ニタマリエス潜ニ
阿内へ赴テ南朝へ降参セト思ヒ楠ヲ頼ニケレモ許
容ナキニヨリテ遂ニ流浪シテ死ス 六月基氏上杉民
部大輔憲顯ヲ以テ鎌倉ノ執事トス芳賀禪可ト
云ル者上秋ト不和ナルユニシテ怒テ謀叛ス基氏自
ラ出馬シ芳賀ヲ打敗ル關東ノ武士皆基氏威ニ
服ス 七日光嚴院法皇崩ス年五十二

四年三月一條前關白經教薨ス。年四十九。佐々木道譽并諸大名等執事道朝ヲ義詮ニ諡ス。八月道朝都ヲ落テ越前へ赴ク。京都ヨリ討手ヲ遣サル。五年七月道朝越前ニテ病死。其子義將降參ス。八月又我右大臣源通相太政大臣ニ任ス。西園寺實俊右府ニ任シ。一條大納言師良内府ニ任ス。九月斯波義將ヲ越中ノ守護トシテ。桃井直常ヲ討シム。同月高麗人來朝ス。十二月義詮カ嫡男義滿從五位下ニ叙ス。其名字宸筆ヲ染ラル。二條關白良基コレヲ取次ク。二條家武家ノ睦キ。此比ヨリノ事ニヤ。六年正月義詮正二位ニ叙ス。二月中殿ノ倭歌ノ御會義詮モ參内。四月鎌倉管領左馬頭源基

氏卒ス。歳二十八。或ハ三十一歳トモイヘリ。瑞泉寺ト号ス。其子氏滿相繼テ關東ヲ領ス。上校憲顯コレヲ輔佐ス。或説ハ義詮哭置ス。クレサルユ尊氏他人ニ奪レシコトヲソレテ。基氏ニ關東ヲアタヘテ。義詮ノタスケトス。然トモ義詮常ニ基氏ヲ疑フ。故ニ基氏神ニ祈テ早世シ。其疑ヲ解ト云ヘリ。八月良基關白ヲ辞ス。雁島司冬通。関白トナル。九月西園寺實俊右府ヲ辞ス。一條師良右府トナル。二條實繼内府ニ任ス。コレハ公秀ガ子ニテ。主上ノ外舅ナリ。同月義詮不例ニヨリテ。政務ヲ義滿ニ譲リ。細川右馬頭頼之ヲ四國ヨリ呼寄。執事トシ。武藏守ニ任ス。管領ト号ス。或説ハ道朝没落ノ後佐々木道譽ヲ執事ト

スベレト必汰アリシヲ基氏聞テ頼之レカレト推舉
セラルユニ今頼之ヲ執事トスト云リ 二月源義
満正五位下ニ叙シ左馬頭ニ任ス時ニ終ニ二十歳ナリ
同月七日征夷大將軍正二位前大納言源義詮逝
去歳三十八寶篋院ト号シ瑞山ト称ス同晦日左
大臣從一位ヲ贈ラル延文三年ヨリ今年ニテ治世
十年ナリ頼之顧託ヲ受テ幼君ヲ輔佐シ天下ヲ
以テ已カ任シ政道私ク法條ヲ立テ是非ヲ決斷
テ文ホアル者ヲシテ義満ノ前ニ侍ラシメ善言ヲ以
テ教導シキ法師六人ニ粟様ノ衣ヲ著セ刀脇指ヲ
帶シ佞坊童坊ト名ケ入ニ諂媚セシム諸士ノ追從輕薄ナ
ル者ヲ公侍童坊ト名ケテハツカシム其心義満ノ諛

佞ヲ遠ガケシメ武士ノ風俗ヲナホサシタメナリ
應安元年二月禪僧中津妙佐ヲ大明へ遣ス今年
大明太祖ノ洪武元年ニアタレリ中津ヲ公絶海ト号
ス妙佐ヲ公汝霖ト号ス二人共ニ文オアル僧ナリ
三月南帝後村上天皇崩ス其子寛成即位長慶
院ト号ス 四月義満元服頼之加冠タリ細川兵
部大輔業氏理髮タリ 六月禁裏仙洞殿下并神
領寺領等沙汰アリテ武士ノ濫妨ヲ停止セシム
同月義満ノ名代トシテ頼之石清水へ參詣銀劔
神馬砂金等奉納ス 九月鎌倉ノ執事上杉憲顯
死其子能憲其姪朝房相ナラヒテ事ヲ執リ兩上
杉ト号ス 十二月源義満征夷大將軍ニ補ス時ニ

十一歳

二年正月楠正儀武家へ降参スヘキ由申ニヨリテ義満御教書ヲ贈ラル

三月楠加勢ノ多クニ京ヨリ細川右馬助頼元赤松判官等ヲ南方へ遣サル

四月正儀入洛先頼之ニ逢テ後ニ義満ニ謁ス

四月叡山衆徒南禪寺ヲ破却セント奏ス公家武家

裁断ナキニ衆徒嗷訴メ日吉ノ神輿ヲ捧テ内裏ニ

振捨火ヲ放トス佐々木宗永コレヲ防ニヨリテ山徒

帰山シ内裏無事ナリ宸翰ヲ宗永ニ賜テ感セラレ

神輿ヲ八咫園ノ社ヘ入テ後ニ帰山 九月斯波義將

越中ニテ桃井直常ト合戦直常敗テ松倉城ニ籠

ル國人皆武家方ニ屬ス 十一月應鳥司冬通關白

ヲ辞ス二條右府師良関白トナル

三年三月桃井直常ク孫直和等越中長澤へ出張ス

斯波義將ト合戦シ直和以下討シテ餘黨没落ス

同日關白師良左府ニ轉ス九條大納言忠基右府ニ

任ス二條實繼内府ヲ辞ス勸修寺前大納言藤原

經顯内府ニ任ス年七十二光嚴院ノ時ヨリ奉公ノ勞

アル人ナリ 四月義満六條新八幡宮并北野祇

園へ参詣 十一月和田某以下南方ノ武士楠正

儀カ要害へ寄テ合戦ス頼之太軍ヲ催シ南方へ

發向シ敵ヲ追拂ヒ山名氏清ヲ河内ニ留置テ南方

ノヲサヘトシテ頼之ハ歸洛ス正儀公武家へ降参スト

云トモ其一族等猶正成正行ガ遺訓ヲ守リ南帝ノ々

メニ忠ヲツクス者アリケルトナシ今年南朝正平ヲ改
テ建徳ノ年号ヲ立タリ

四年二月山名時氏死ス 同日鎮西菊池武政以

下南朝方ノ者トモ起ニヨリテ今川伊豫守良世入道

了俊ヲ九州ノ探題ニ補シテ下向大内義弘ヲ相副ラ

ル此比菊池九州ヲチヒカシ其取立タル南朝ノ宮ヲ關西

親王良懷ト云使者船ヲヒタテ大明へ遣ス其狀二百

本國王良懷ト書セリ大明ヨリ日本國王へ來ル使者

ヲモ筑紫ニテヨリ京へヤラス其返事ヲ調テ遣スヨ

リテ大明ニ良懷ヲ真ノ日本ノ王ナリトヲモヘリ

三月主上位ヲ東宮緒仁ニ讓ル

年号 文和四年 延文五年 康安一年 貞治六年
應安四年 在位合テ二十年

日本王代一覽卷之六下

百代

後圓融院

謝ハ緒仁後光嚴院ノ長子ナリ母ハ崇

賢門院四辻大納言藤原兼綱ガ娘ナリ

應安四年三月ニ受禪時十四歳後光嚴院上皇院

中ニテ政キコシメス此時光明院崇光院モ猶存生ニテ伏

見ニシメス讓位ノ沙汰兼テ崇光院キコシメシ御子

榮仁親王正統ナル上日頼之ニ仰談セラレトモ後光

嚴モ深ク頼之ヲタノミタニフニヨリテ伏見殿ノ望カテハ

スコレヨリ崇光ト後光嚴ト御兄弟不和ナリ

五月細川右馬助頼元南方へ發向 同月細川武

藏守頼之故アリテ管領職ヲ辞メ西山西芳寺ニ赴

在位一覽

百代

名義滿赤松律師則祐等ヲシテ呼カハス頼之即歸洛
或説ニ頼之已カ威ツヨクシテ人ノ畏ルコト甚クサト
リテ其威ヲ滅シ義滿ニ威ヲツケシタメワサト義滿ト
密談相約シ諸大名出座ノ時義滿ニツヨクシカラレテ
迷惑ノ体ニテ丹波ノ山國へ暫蟄居スコレヨリ人皆將
軍家ヲヲモズト云リ 七月藤原經顯内府ヲ辞
ス 同月桃井直常越中へ出張合戦ス 八月南
方ノ兵蜂起メ楠カ要害ヲ攻メ京都ヨリ加勢ヲ多ク
遣サル 十月石清水八幡宮叡山造督頼之相摸
守ニ任ズ 十一月赤松則祐死ス歳六十
五年三月今川了俊筑紫ニ菊池武政等ト合戦大
内々義弘兵ヲ率ヒ了俊ヲ救テ勝利ヲ得タリ

九月萬壽寺ヲ五山ノ列トス東福寺武家ノ制法
ヲ甘ク五山ノ名ヲ除ントス寺僧謝メカワルコトナシ
其外禪宗法条ヲ定ル 十一月義滿判始石清水
神領ヲ寄附セラル時十五歳ナリ今年南朝改元文
中

六年三月細川左衛門佐氏春南方退治ノタメ尼崎
ニ陣ス 六月大明ノ使僧仲猷無逸鎮西ヨリ入洛嵯
峨ニ居シム其趣大明ヨリステ使者ノ二度日本ヘワ
タスト云トモ筑紫ニテ菊池ニヲサヘラシ京ヘ到ルコトアタ
フス故ニ兩僧ヲシテ来シム義滿聞テ驚ク 八月南
帝長慶院位ヲ其弟熙成王ニ讓テ吉野ヲ没落ス南
方ノ餘黨河内天野ニ陣ヲ取テ京勢ノ陣ヘ夜討ス

同日佐佐木道譽死ス。九月大明兩使僧歸國。十月鎌倉五山ノ事。住持職ハ義滿ヨリ沙汰セラレ。其外ノ寺法ハ鎌倉ノ管領氏滿ノハカラヒタルベシト定ラル。十一月義滿從四位下ニ叙シ。參議ニ任シ。左中將ヲ兼テ。左馬頭ヲ鎌倉ノ氏滿ニ授ラル。十二、義滿九州發向ノ評議アリ。頼之へト相分リテ。鎌倉ノ上校彈正朝房ヲ召テ。京都ノ警固トシ。仁木義長ヲシテ。伊勢ノ北畠ヲシテ。山名氏清ヲシテ。南方和田楠カ一族ヲシテ。武田小笠原ヲシテ。伊豫ノ金谷等ヲシテ。其外東ハ伊豆ヲ限リ。北ハ越後ヲ限テ。諸國ノ軍勢ヲ召アソム。

七年正月後光嚴上皇崩ス。年三十七。二月義滿

筑紫發向。頼之斯波義將。畠山義深。仁木。今川。土岐。佐々木等ガ一族。大名三十九人。軍勢十萬騎ニ及ベリ。山名師氏赤松一族先陣タリ。四月義滿安藝ニ到ル。先陣長門ニ到テ。菊池武政ト合戦ス。山名赤松敗北スト云トモ。細川讚岐守義之ガ四國ノ勢ヲツキテ。攻カリケシ。嶋津伊東等菊池ニ背テ降ス。菊池敗テ。征西將軍ノ官ヲ具シ奉テ。宰府ニ陣ス。原田秋月等九州ノ者トモ。皆菊池ニ背ク。菊池筑後ノ高良山ニ陣ス。義滿宰府ニ到ル。細川山名赤松等菊池ト合戦數度ニ及ヘリ。九月菊池降フ云テ。和平ノ儀調リテ。菊池肥後へ歸ル。義滿日向ヲ伊東ニアタヘテ。筑前肥前ヲ少貳ニサツテ。豊後ヲ大友ニ

三十一
三十四

賜リ長門豊前ヲ公大内義弘ニ賜ス筑後肥後并肥
前ノ内ニ菊池カ兵處々ニ城ヲ構テ守レリ 十月
義滿歸洛 十一月上秋朝房鎌倉へ歸ル此ヨリ義
滿ノ武威大ニ盛ニシテ南方モ畏レカ公諸國ノ武士皆
京都へツトヘリ 十二月主上即位ノ儀式行ハル踐祚
以後世上ニツカナラズ其上春日ノ神木故アリテ入
洛年ヲ歷ケルユニ藤原氏ノ輩公役ニ出カタキ故ニ
大禮延引セラル

永和元年三月義滿石清水參詣行粧濟々太刀神
馬砂金奉納アリ善法寺ヲ宿坊トス當社者義家
ヨリ源家ノ氏神タルニヨリテ殊ニ崇敬セラレ 四月
義滿初參内 八月義滿館倭歌會 同月筑紫ニ

テ太宰少貳冬資逆心アリテ探題今川了俊討レ
又公十月御禊十一月大嘗會又延引ニヨリテ武
家ヨリ申シ沙汰ス 同月義滿從士二位ニ叙ス
十二月二條師長関白左府ヲ辞ス九條右府忠基
左府ニ轉ニ関白トナル師良ガ弟大納言師嗣右府
トナル近衛大納言兼嗣内府トナル此時二條良基
九條經教近衛道嗣應鳥司冬通二條師良五人共ニ前
關白ニテ致仕セリ今年南朝改元天授
二年正月禪僧絶海汝霖大明ヨリ歸朝此僧大明ノ
太祖皇帝ニ謁セシ時徐福カ事ヲ問タミヒケル絶海詩
ヲ献ス御製衣ノ和韻ヲ賜レリ 七月荒川某石見
國ノ守護ニ補セラレテ下向ス此時直冬既ニ降參シ

ケレ。義滿其罪ヲ赦シテ。石洲ニ居シム。十二月。頼之并諸大名馬ヲ貢ス。

三年。朝鮮國ノ使者鄭夢周來朝。筑紫ニテ探題今川了俊ニ逢テ。歸國。

四年三月。義滿犬追物ヲ興行ス。同月。義滿室町ノ新館へ移徙。室町殿ト号ス。庭ニ花ヲ多ク栽ルコト。

花御所ト号ス。同月。義滿大納言ニ任ス。四月。鎌倉ノ上杉能憲死ス。其弟刑部大輔憲春代テ事ヲ行フ。

八月。關白忠基左府ヲ辞ス。二條師嗣左府ニ任ス。近衛兼嗣右府ニ任ス。今出川前大納言藤原公直内府ニ任ス。義滿右近衛大將ヲ兼ラル。

十一月。南方ノ橋本民部等。紀州ニ蜂起シ。細川兵部

大輔氏春ト戰ス。京ヨリ細川右京大夫頼元。山名修理大夫義理。岡陸奥守氏清。并石堂赤松等。紀州へ發向。敵没落スルニヨリテ。京勢歸陣。

十二月。義滿從二位ニ叙ス。同月。南方又蜂起。義滿自ラ東寺ニテ出テ。山名義理氏清等ヲ遣テ。退治セシム。

康曆元年正月。義滿馬寮御監トナル。同月。山名義理氏清等。紀州ノ敵ヲ攻破リ。土丸城ヲ攻落ス。又

湯淺カ城ヲモ攻落ス。二月。鎌倉管領左馬頭氏滿逆心キサシ。京ヲ攻シトス。上杉憲春諫レドモ許容セズ。

同月。南都ノ衆徒ノ訟ニヨリテ。大和ノ十市。某ヲ退治セシメテ。京都ヨリ。斯波左衛門。佐義將。并一色富樫

赤松等。近江勢。羨濃。土岐勢ヲ副テ發向セシム。其折

節洛中騷動コレヨリテ南都發向ノ勢ヲ召返サレ、
トコニ義將并土岐勢路次ヨリ没落義將公江州ヨリ
歸洛ス土岐大膳大夫公隱謀ノキコヘアルヨリテ義
滿御教書ヲ諸國へ遣ヒ土岐ヲ誅セシム 三月義
滿鎌倉ノ隱謀ヲ聞テ自筆ノ狀ヲ上ル憲春ニタテテ
テ都鄙靜謐ノ事ヲ仰遣サル憲春教訓スレトモ氏滿
邪謀止サルヨリテ憲春自害ス氏滿驚悔テ逆心稍
解又憲春カ弟安房守憲方ヲ用テ政事ヲ掌シム
憲方始テ鎌倉ノ山内ニ居レリ 同月土岐大膳
大夫赦免セラレテ使者ヲ京へ獻ス依々木大膳大
走路ヲ塞テ通サス義滿聞テ土岐ヲハ弥ユルサレテ佐
々木ヲ誅代セントス 四月土岐依々木共ニ赦免セラ

レテ上洛 閏四月十四日洛中騷動諸人武具ヲ帶
テ義滿ノ花御所へ馳集ル二階堂中務松田丹後守
ヲ使ヒレテ細川武藏守頼之ガ宅へツカハレ管領職
ヲ止テ四國へ赴シム其弟頼元等一族皆勘氣ヲ蒙ル
頼之ハ出京ノ時剃髮シテ名ヲ常久ト改ム翌日禪
僧妙葩春屋ト号ス丹後ヨリ歸洛此僧ハ夢窓弟子
ナリ義滿治世ノ初山門嗽訴ノ南禪寺ヲ破セント云
レ時頼之ガ沙汰遲クナリトテ妙葩怒テ久ク丹州
蟄居セシカ頼之出京ヨリ妙葩ハ歸京スルニヤ
同日斯波義將ヲ管領トス 六月妙葩ヲ南禪寺
ノ任持トス 七月義滿右大將ノ拜賀山名氏部義
幸侍所ノ當職ニテ隨兵百騎ヲツレテ先陣ニ供奉ス

月卿雲客モ扈從ス。八月九條忠基関白ヲ辞ス。
二條師嗣關白トナル。九月義滿御教書ヲ以テ。頼
之入道常久ヲ誅セシムヘキ由ヲフレラル。然レトモ頼之
罪ナキニヤ。赦免セラシ。阿波淡路讃岐伊豫四國
ノ總管トシテ在國セリ。

二年正月僧妙葩國師号ヲ蒙リ僧録司ニ任セラレ
僧録ト云コト。是ヨリ始ル。同月義滿從一位ニ叙ス。

二月義滿ノ弟滿詮左馬頭ニ任ス。鎌倉ノ氏滿左兵
衛督ニ任ス。五月關東ニテ小山下野守義政上。宇都
宮下野前司基綱ト合戰。基綱討死。氏滿小山追討
ノ多ニ上。叔憲ヲ遣ス。同月大内新公其弟三郎

上。勢州ニテ合戰。討ル者二百餘人。六月光明院

法皇崩ス。年六十。七月山名氏清南方ノ敵ヲ打破
テ。其張本民部大輔等十人ノ首ヲ京都ヘ獻ス。

八月紀州南方ノ黨類多ク没落。九月小山義政

鎌倉ヘ歸伏ス。十二月春日ノ神木歸座関白大

臣公卿藤原氏供奉ス。今年義滿鹿苑院并寶幢

寺ヲ建立。此比ノ事ニヤ。日本ノ僧如瑤ト云モノ。大明

ヘ渡リ。彼國ノ大臣胡惟庸ニ逢リ。胡惟庸逆心ア

リテ。大明ノ太祖ヲ弑シトタクミケルユ。如瑤ヲタノミ

日本ノ加勢千人ヲ招テカクレラキ。太祖ノ行幸ヲ

催ス。太祖許容シ。既ニ惟庸カ家ヘ行幸セシメス。ト

キ。訴入アリテ其事アラハレ。惟庸殺サレ。如瑤ヲ執

テ流罪ス。コレヨリ海上ニ番船ヲ置テ。日本人ヲニ交リ

ニヨセス

永徳元年三月義満ノ館行幸 七月二條前関白
良基太政大臣ニ任ス。今出川公直内大臣ヲ辞ス。
源義満内大臣ニ任ス。年二十四義満良基和睦シテ。
公家武家ノ政事ヲ相談ス。今年南朝敗元弘和此
時前朝ノ舊臣猶殘リテ。新葉倭歌集ヲ撰セリ

二年正月山名氏清河内ヲ攻テ南方ノ軍ヲ破ル。此
時楠正勝敗テ赤坂ノ城モ落ヌ。和田モ戦負テ和泉
國氏清ニ取レヌ。紀列モ漸山名三十ヒキヌ。千劔破城
ハ猶殘レリ。氏清カ父時氏ステニ因幡伯耆等數州
ヲ領セリ。今氏清カ一族彼此合テ十箇國ノ守護
ヲ兼タレハ日本六分上ヲ領セリトテ。山名カ家ヲ六分

一殿ト云ナラハセリ 同月義満左大臣ニ轉任ス。右大
將元ノコトシ日ノ歴テ左大將ニ轉ス。大納言藤原實
時内府ニ任ス 閏正月義満藏人所ノ別當ニ補セ
ラル 三月義満牛車ヲ聽サル 四月主上位ヲ
御子幹仁ニ讓ル 此代初三年ハ先代ノ應安ヲ
用テ其後ニ永和四年 康暦二年 永徳二年
在位合十一年

百一代

後小松院 諱幹仁。後圓融ノ長子ナル母ハ通陽門
院藤原嚴子ト云ニ條内大臣公忠カ娘ナリ
永徳二年四月六歳ニテ踐祚。三條前関白太政大
臣良基攝政。後圓融上皇院中ニテ政務沙汰セララル

左大臣源義滿院ノ執事別當ヲ兼ラルル
同年十二月即位ノ禮行ハル本朝帝王即位ノ時
公高御座ノ中ニテ執柄ノ人傳授シ奉ルコトアリ。近
代兵亂打ツキケル故其事レレル人スクナシ良基能
傳知ルユ。光明宗光後光嚴後圓融今上ニテ。五代
ノ御師範タリ。二條家コレヲ以テ榮トセリ良基廣ホ
ニテ著セル書多シ。武家ニレタレキユニ家傳ノ外諸家
ノ舊記ヲモリマタ取アツメテ。子孫ニ傳ヘタリ。故ニ朝廷
ノ儀式武家ノ故實ヲモ多ク二條家ヨリ勘進セラ
ル。トナシ
三年正月。踏歌ノ節會義滿内弁ヲ勤ム。同月。義滿
共學淳和兩院別當ヲ兼テ源氏ノ長者ニ補セラレ。

兩院別當源氏長者公鳥羽院ノ勅ニテ代々久我ノ
家ニ補任セラレ。此ヨリ武家連綿シ任セラレ。

六月。義滿准三宮宣下。十月。義滿ノ館へ行幸。

十二月。主上ノ外祖三條前内府公忠薨ス。今年。義
滿相國寺ヲ造営シ。春屋妙葩ヲ開山トス。然レトモ夢
窓ヲ推テ開山ニ用フ。

至徳元年三月。義滿大將ヲ辞ス。今年。南朝改元。元中
二年八月。義滿春日詣。今年秋。前管領細川常久。
阿波寶冠寺ヲ建テ。僧絶海ヲ開山トス。及ニ。義
滿絶海ヲ召テ。等持寺ニ居シム。

三年七月。義滿五山ノ座位ヲ定ム。南禪寺ヲ五山
ノ上トシ。住持義堂周信ニ公祐ヲ賜フ。天龍寺ヲ五

山第一トス。相國寺ハ第二。建仁寺ハ第三ナリ。東福寺ハ第四。萬壽寺ハ第五ナリ。鎌倉ノ五山ハ建長寺ヲ第一トシテ。天龍寺ノ次ナリ。圓覺寺ヲ第二トス。壽福寺ヲ第三トス。淨智寺ヲ第四トス。淨妙寺ヲ第五トス。コレヨリサキ。既ニ座位ノ沙汰アリト云トモ。此時決定シケルニヤ。五山ノ次ヲ十刹ト云其座位ヲモ定ラル

嘉慶元年正月。主上十一歳。元服。攝政良基加冠タリ。義滿理髮タリ。同日良基攝政ヲ辞シ。太政大臣ヲ辞退ス。二月。近衛右府兼嗣攝政

三月。近衛前關白道嗣薨ス。年五十五。兼嗣ノ父ナリ。十二月。從一位大納言源善成准大臣。是ハ順徳院ノ

子孫ニテ博識ノ人ナリ。源氏物語河海抄ハ此人ノ作ナリ。

二年三月。攝政兼嗣薨ス。年二十九。四月。二條良基又攝政。凡執柄當職四ケ度ナリ。五月。義滿左大臣ヲ辞ス。徳大寺内府實持左府ニ任シ。大納言源具通右府ニ任シ。二條大納言經嗣内府ニ任ス。經嗣ハ二條良基ノ子ナリシヲ故一條前關白經通養テ家ヲ續シム。六月。攝政良基薨ス。年六十九。後福光園院ト号ス。其子師嗣再關白ニ任ス。今年義滿紀例ノ濱ニ遊ヒ。又富士山見物

康應元年七月。西園寺右府實俊薨ス。年五十六。是ハ建武ノ比父大納言公宗。逆心ニヨリテ。誅セラレシ時

胎内ニテリシ子ナリ。後醍醐南山へ移テ。武家ノ代ナリレユ。此人赦免セラレテ。其家ヲ續タリ。九月。義満高野參詣

明德元年四月。尊氏三十三回忌ノ追善。義満執行セラル。法華八講アリ。四箇ノ大寺ノ貴僧。高僧皆参ル。義満并関白師嗣等ノ公卿。著座殿上人。出座。義満モ自ラ布施ヲ引レケルトソ。義満出仕ノ時。八月。卿雲客庭ニ降テ。蹲踞。各装束嚴重ナリ。サレトモ。義満ノ側ニ。畠山將監父子三人。并関口某太刀ヲ帶金鞭持テ相從リ。赤松門庭ヲ警言固ス。八講ノ外。様々ノ法事アリ。今年。山名時熙同氏幸武命ヲ背ク。山名陸奥守氏清。同備磨守滿幸ヲレテ討シ。氏清。彼ハ一族ノ内ナト。他月。赦免アル。ケンハ合戦ニ及ズ。教訓ヲ加ヘシ。若誰人申ストモ。其罪赦免アル。レキナラバ。誅伐スヘト申ス。義満其罪赦スヘカラス。早ク退治スヘト命セラル。氏清發向シ。時熙氏幸没落ス。二年。細川常久四國ヨリ召レテ。上洛。義満政道本ノ如ク常久ニ任セラレ。細川右京大夫。頼元ヲ斯波義將ニ代テ管領トス。頼元。常久第十カラ養子ナリ。或此時。常久管領ニ再任ストモ云リ。十月。山名氏清。宇治ノ紅葉ヲ。義満ノ御覽ニ備ント請ケレバ。許容アルニヨリテ。日ヲ定テ。經營ス。其比時熙氏幸。替ニ上洛シ。罪ヲ謝シケレバ。義満。氏清ニ直談セントテ。宇治へ赴ク。滿幸此ヲ知テ。氏清ニ告ク。氏清既ニ和泉ヨリ

三十一卷六
四十二

定^{ヨリ}テ来ケルガ其日ニ及^フテ俄^カニ病^ト称^ジテ^テ宁治^ヘ赴^ル
る義満不悦^シテ空^ク飯^ル十一月満幸仙洞ノ御領ヲ
妨^ムルヨリテ出雲ノ守護職ヲ止^ラレテ洛中ニ置^スス
丹波^ヘ追下^サル満幸怒^テ和泉^ヘ赴^テ氏清ニ謀^ルラ
スム氏清元来^ニ逆心^{アル}上満幸ハ甥^トナカラ^テ塔^{ナリ}又
此時時熙氏幸^ステニ赦免^セラレテ本領安堵^シケレ
氏清カタク不安^思テ遂^ニ謀叛^ス十二月二十九
日氏清満幸和泉丹波ヨリ相分^テ京^ヘ改入^ル義満
常久等諸大名ヲ^シテ此ヲ拒^ムル晦日内野并ニ
洛中所々ニ^テ合戦氏清カ弟義數并家老小林ハ
大内義弘ト戦^テ討^レ又満幸ハ常久并^ニ畠山基國
ト戦^テ敗軍ス氏清ハ京中^ヘ乱入^ス大内義弘赤松

義則山名時熙等ト戦^テ氏清勝ニ乘^シカ義満白
旗ヲ進^ラル一色詮範斯波義重先陣^{ナリ}氏清敗軍
ス詮範其子満範ト相共ニ氏清ト戦^テ氏清ヲ討
殺ス歳四十八満幸ハ逃^去

三年正月氏清満幸カ舊領ヲ分^テ丹波ヲ細川頼
元ニ給^リ丹後ヲ一色満範ニ義作ヲ赤松義則ニ和
泉紀伊ヲ大内義弘ニ出雲隱岐ヲ佐々木高明直
馬ヲ山名時熙ニ伯耆ヲ山名氏幸ニ給^テ又若狹今
富庄ヲ一色詮範ニ給^リ山城國內ノ領地ハ畠山基
國ニ給^ル氏清カ兄義理ハ紀伊ニテリ方大内義弘發
向^シ政ケシ義理城ヲ去^リ遂^ニ電^テ又此比畠山河内國
ヲ領^シ千劔破城ヲ攻落^ス楠正勝十津河邊ニ流

浪ス其弟正元公。潛ニ京へ入テ義滿ヲ子ラヒケレトモ
事テラハレテ殺サルカリケレハ南方モ弥衰テ和泉
河内ノ和田楠カ一族。畠山大内カ家人トナル者多シ。
二月武藏守頼之入道常久卒ス。歳六十四。永泰
院ト号ス。葬禮ノ時義滿自是ヲ送ラル。四月公
家武家并諸寺諸社ノ沙汰アリテ賞罰ヲ紀ス。
八月相國寺供養。義滿執行セラル。月卿雲空。扈從
ス。管領細川頼元侍所。畠山基國以下武士ノ行糺
嚴重ナリ。御齋會ニ准セラレ。住持明應導師。多ク五
山十刹皆出仕。他宗門跡等モ出座。十月大内
義弘和泉國ニ居テ。義滿ノ命ヲ受。南方和睦ノ義
ヲツクロヒ。閏十月二日。南帝熙成王入洛。嵯峨ノ

大覺寺ニ到著。其儀式行幸ノ如シ。同五日。南帝
三種神器ヲ禁中へ渡サル。熙成王公太上天皇ノ尊
號ヲ蒙テ。後龜山院ト号ス。延元二年。後醍醐天皇
吉野へ入給レヨリ。此ニ至テ五十六年ニシテ。南北始テ
一統ス。然レトモ南方ノ餘類。少々猶吉野ノ奥ニ殘ケ
ルモアリトナン。十二月。義滿左大臣ニ再任ス。徳大寺
實時左府ヲ辞スルニヨリテ也。今年朝鮮ノ使者
来テ。鄰好ヲ修セシテ。請義滿許容ス。
四年四月。後圓融上皇崩ス。歳三十六。泉涌寺ニテ
葬禮。義滿モ送タテマツラル。八月。石清水放生
會。義滿參詣。九月。義滿左大臣ヲ辞シテ。伊勢太神
宮へ參詣。同年。斯波義將再管領ニ任ス。

應永元年三月源具通右大臣ヲ辞ス今出河前内
府公直右大臣ニ任ス 六月一條内府經嗣左大臣
ニ任ス德大寺前左府實時太政大臣ニ任人准大臣
源善忠内府ニ任ス 九月義滿日吉參詣 十一月
二條經嗣関白ヲ辞ス一條經嗣関白トナル
十二月十七日義滿ノ嫡子義持九歳ニテ元服正五
位下ニ叙シ左中將ニ任シ禁色昇殿ヲ聽カル義滿征
夷大將軍ヲ義持ニ譲ル凡叙爵公攝家ハ正五位下
其外ハ清華トイハモ從五位下ナリ今義持ノ叙爵
攝家ニ准ス 同月德大寺實時太政大臣ヲ辞ス二
十五日義滿太政大臣ニ任ス歳二十七同日今出河
公直右大臣ヲ辞シテ其子大納言實直ニ譲ル源善

成内府ヲ辞シテ花山院大納言通定内府ニ任ス或
説云平清盛ガ外ハ武家相國ニ任スル例ナケレバ
義滿昇進如何ト公家ヨリ申サレケレバ義滿怒テ
公家ノ領地ヲ押ヘントシ又自國王トナリテ細川畠
山等ヲ攝家清華ニ准セント云リ朝廷大ニ畏テ
許容アリト云リ

二年正月白馬節會義滿内辨ヲツトム 二月今
出河實直右府ヲ辞ス花山院通定此二代ハ洞院公
定内府ニ任ス 四月義滿館へ行幸 同月関白
經嗣左府ヲ辞ス今出河前右府公直左府ニ任ス
六月義滿太政大臣ヲ辞ス久我前右府源具通太
政大臣ニ任ス今出河公直左府ヲ辞ス花山院通

定右府ヲ辞ス 同月義滿落飾歳三十八道号ハ
天山法名ハ道義ト云 七月前内府源義成左府
ニ任ス公定内府ヲ辞ス 八月義成官ヲ辞シテ
新髪 九月公定右府ニ任ス二條大納言藤原公
豊内府ニ任ス 十二月二條大納言實冬内府ニ任ス
今年山名滿幸誅セラレ

三年二月源具通太政大臣ヲ辞ス 四月源義持
正四位下ニ叙ス 七月洞院右府公定左府ニ任ス
三條實冬内府ヲ辞ス大納言藤原嗣房内府ニ任ス
九月義持参議ニ任ス 同月源道義叡山ニ登ル其儀
式御幸ニ准セラル武家ヲ公方ト称スル此比ヨリノ
事ナルハ道義参内ノ時禁中ニ便且所アリシレ

小御所ト云リ出入ノ時伺候ノ月卿雲客皆庭ニ下
テ蹲踞ス其内武家ニシタレキヲ昵近衆ト云

同年今川了俊九州ヨリ歸ル始尊氏ノ時了俊ガ父
國範駿河遠江ヲ領セリ駿河ヲ長子範氏ニ譲リ遠
江ヲ了俊ニ譲ル範氏死シテ其子泰範ト了俊ト
不和ナリ了俊久ク筑紫ニアリテ其子ハ遠江ニ
泰範ヨリク了俊カ事ヲ諛レテリ其上大内義弘九
洲ニ探題ヲ望テ了俊筑紫ニアレトモ其子遠州ニ
居故鎌倉氏滿ト志ヲ通スル由ヲ申ス又管領斯
波義將勘解由
小路ト号ス 其一族澁河ヲ探題ニサントノ志
アリテ彼是ニテ了俊探題ヲ出ラレテ歸洛此以後
公筑紫中國ノ事義弘ハカラヒ申ケリ了俊ハ連参ノ

トカニアフテ遠江ノ本領ヲモクシテ蟄居シケルトナシ
四年正月義持從二位ニ叙シ三月申納言ニ任ス
四月道義北山ノ別業ニ新館ヲ構テ移居ス室町ノ
館ヲ公義持ニ讓ル道義ヲ北山殿ト号ス此所ハ西
園寺ノ領ナリシヲ道義取テ居所トス其經營華麗
ナル故世人金閣ト云大樹ヲ義持ニ讓トイヘトモ政務ハ
皆道義少汰セララル 同日道義春日參詣

八月遣唐使ヲ立ラル 十二月九條前關白忠基薨
ス歳五十三 今年筑紫ニテ小貳菊池千葉大村野
心ヲサレハサム大内義弘ヲヒテ平シム或説ニハ義弘
軍功ニ誇テ驕ケル故道義密ニ小貳菊池ニ命メ
義弘ヲハカラハシムルト云リ然レトモ義弘勝利ヲ得ル

ヘガハルコトナシ義弘カ逆謀コレヨリキサス

五年正月義持正二位ニ叙ス 同日崇光院崩ス
年六十五 二月一條前關白師嗣子道忠名ヲ滿
基ト改メ滿ノ字ハ道義ヨリ授ラル 一條家ニ武家
ノ諱ノ字ヲウクル 此ヨリ始ル 四月一條經嗣關
白ヲ辞ス 二條師嗣又關白トナル 八月朝鮮使
者朴敦之來朝大内義弘是ヲ接待ス道義昏ヲ贈
ラル 十一月鎌倉管領源氏滿卒ス永安寺ト号
ス年四十二其子滿兼相續ス上杉朝宗家老タリ
滿兼ガ弟滿直ハ奥州ノ管領タリ後河殿ト号ス
同日道義畠山基國ヲ管領トス此ヨリ以後斯波細
川畠山カハルク管領トナル此ヲ二管領ト云又山名

赤松一色京極ガハル侍所ヲ司ル此ヲ四職ト云其
副ヲ所司代ト云京極公佐々木ノ一流道譽ガ未ナリ
關東ニモ此ヲニセテ鎌倉公領ラハ私ニ將軍ト云御
所ト称シテ其家老上秋ヲ管領ト称シ千葉小山
長沼結城佐竹小田宇都宮那須ヲハ家ト称ス
是ハ皆頼朝ノ時ヨリ名アル家ナリ

六年二月二條右府實冬左府ニ轉ス九條内府教
嗣右府ニ任ス近衛大納言良嗣内府ニ任ス

四月二條関白師嗣落飾歳四十七二條經嗣又関
白ニ任ス九月相國寺七重大塔供養十月大内

左京大夫義弘筑紫中國ノ兵ヲヒキヒテ和泉ノ塚
ニ著テ上洛セス却テ關東へ通謀叛ノ企アリケル

道義討ニ僧總海ヲ使者トシテ此ヲナタメサトサル

イ人氏同心セス十一月道義自八幡ニ出テ管領畠

山基國前管領斯波義將細川頼元等ヲ和泉へ發

向セシ義弘城ヲ構テ拒戰十一月京勢和泉ノ

城ヲ攻テ火ヲ放ツ義弘馳テ基國ガ陣ヘカケ入基國

ガ子滿家ト戰テ義弘討シテ其子新次降參ス泉

塚ノ在家一萬間燒亡

七年正月義持從二位ニ叙三月足利直冬右見

國ニテ卒ス五月九條前關白經教薨ス歳六十九

八年二月内裏炎上道義北山第ニ行幸三月義

持大納言ニ任ス時二十六歳五月日吉社法華

八講道義義持并二門跡公卿參詣今年道義書

三代 賢六 四十七

簡之。大明皇帝ニ贈リ。黄金千兩及器物若干ヲ遣
九年正月。義持正二位ニ叙ス。二月。大明建文帝書
簡ヲ道義ニ寄ラル。其書中ニ日本國王道義ト云リ
八月。道義兵庫ニ遊フ。同月。二條左府實冬。太政
大臣ニ任ス。近衛内府良嗣左大臣ニ轉。今。出河大納
言公行内府ニ任ス。九月。道義北山ノ館ニテ。大明使
僧道彝一如ニ對面。明朝ヨリ錦綺并ニ曆ヲ贈ル

十一月。義持從一位ニ叙ス。内裏ヲ造ル賞也。
十年三月。義持石清水參詣。八月。九條教嗣右府
ヲ辞ス。内府公行右府ニ轉。一條大納言滿基内府
ニ任ス。十一月。大明成祖皇帝書簡ヲ道義ニ寄テ。
其即位ヲ告ラル。十二月三月。中納言源滿詮大

納言ニ任シ。從二位ニ叙シテ。即剃髮。此ハ道義ノ弟也。

十一年五月。大明使者来ル。道義北山ニテ對面

八月。九條前右府教嗣大和内山ニテ薨ス。

十二年。斯波義重管領ニ任ス。同年。上杉右京亮

憲定。鎌倉ノ執事トナル。

十三年八月。義持右大將ヲ兼ス。此年壹岐對馬ノ

海賊大明ノ邊鄙ヲ侵ス。大明成祖皇帝ヨリ。道義ヲ

タノミテシメラル。道義其張本ヲ捕ヘテ平ク成祖

ヨリ勅書并ニ様々ノ音物来ル。

十四年正月。義持馬寮御監トナル。二月。三條太政

大臣實冬。剃髮。

十五年三月四日。道義最愛ノ未子義嗣叙爵。

同月八日。北山へ行幸。関白經嗣以下扈從道義法
服ヲ着シ。數珠ヲ持。義嗣ヲ携テ。門下ニ出テ行幸ヲ
迎フ。十餘日御止宿。管絃倭歌ノ遊アリ。其會ノ座次。
御製ノ次ニ沙門道義。其次ニ源義嗣。其次関白藤
原經嗣以下ナリ。義嗣左馬頭ニ任ス。正五位下ニ叙
シ。又從四位下ニ叙シ。左中將ニ任ス。此度義持公京
ニ留テ北山へ赴ス。道義驕ノ餘。義持ヲ疏シ。義嗣ヲ
愛シ。行幸ヲ催シ。関白ノ上ニ直テ。其威名ヲ重セン
爲ナルヘシ。四月。經嗣関白ヲ辞ス。近衛左府良嗣
関白ニ任シ。名ヲ忠嗣ト改ム。義嗣ヲ避ルナルヘシ。
同日。義嗣内裏ニテ元服。其儀式親王ニ准ズ。參議ニ
任ス。從二位ニ叙ス。中將元ノ如シ。時十五歲。

五月六日。前征夷大將軍太政大臣從一位准二官
源義滿法名道義。北山館ニテ薨ス。歲五十一。鹿苑院
殿ト号シ。天山ト称ス。勅ヲ太上天皇ノ尊号ヲ贈
ラル。義持辞シテ受ス。應安元年ヨリ。應永元年ニ至
在職二十七年。義持ニ讓テ。後十四年。合治世四十一
年。道義遺跡誰ニト申置カル。上旨ナシ。義嗣。寵愛
義持ニコトシ。此トヤ思シケ。サレトモ義持ステニ家督
タルウハ管領斯波義將入道勢ツミク。義持ヲ輔佐セ
リ。十一月。源義持諸國關所ノ事ヲ沙汰ス。管領斯
波右兵衛督義重。押判飯尾常廉奉行ス。義重ハ義
將カ子ナリ。十二月。大明成祖皇帝書ヲ義持ニ
贈リ。義滿ヲ吊ヒ。祭文ヲ作り。泰獻王ト謚ス。

十六年二月。近衛忠嗣。関白ヲ辞ス。三月。二條内
府滿基。關白ニ任シ。左府ニ轉ス。同月。朝鮮使者來。
六月。義持石清水ニ請テ。伊勢太神宮へ參ラル。
前。管領斯波義將。大樹ノ命ヲウケテ。返翰ヲ朝鮮。執
政ニ遣シ。先代ニカハラス。隣好ヲ修ス。義將私ニ朝鮮
板ノ一切。經ヲ求ム。七月。義持内大臣ニ任ス。年二十
四。同月。鎌倉管領源滿兼卒ス。年三十四。三勝光
院ト号ス。其子持氏相續。上。叔憲定ニシテ。輔佐ス。上
。叔朝宗。公滿兼ヲ慕テ。葬所ヨリ直ニ世ヲ遁テ。閑
居時。歳七十ナリ。十月。義持三條坊門ノ館ニ移ル。
十一月。義持八幡參籠。一七日。斯波義淳。其父義重
ニ代テ管領トナル。

十七年正月。源義嗣。中納言ニ任ス。四月。義持高野
參詣。同月。二條関白滿基ノ子基教。名ヲ持基ト
改ム。先例ニヨリ。義持ノ諱ノ字ヲ授ラル。六月。畠
山滿家。管領任ス。十二月。関白滿基薨ス。一條經
嗣。又關白ニ任ス。

十八年四月。今出川右府公行。左府ニ任ス。應鳥司大納
言冬家。右府ニ任ス。九月。源高食ヲシテ。飛騨國司藤
原尹。繼ヲ討シム。十二月。義嗣大納言ニ任ス。
同月。鎌倉上。叔安房。守憲定死ス。其再從弟右衛門
佐氏。憲ヨリニ代テ。持氏ノ家老トナル。氏憲。朝房ガ
子ニテ。朝宗カ姪ナリ。氏憲。剃髮シテ。名ヲ禪秀ト改
ム。大懸。入道ト号ス。憲定ガ子憲基。ト不和ナリ。上

叔公藤原姓ニテ。勸修寺ノ庶流ナリ。上叔重房ト云
モ、宗尊親王ノ供奉シテ。鎌倉ヘ下シヨリ。關東ニ住
セリ。其子ヲ賴重ト云。賴重カ娘清子公尊氏直義ノ
母ナリ。清子ノ兄弟ヲ憲房重顯ト云。憲房カ子民
部太輔憲顯公。憲定憲基カ祖ナリ。是ヲ山ノ内ト
云テ。上叔一家ノ棟梁ナリ。憲顯カ弟輝正少弼。憲藤
公禪秀カ祖ナリ。重顯カ子孫ヲ八景谷ノ上叔ト云。其
外相分テ。越後ニ居モノアリ。上野白井一住スルモア
リ。又京鎌倉往來スルモノモアリ。基氏ヨリ氏滿滿兼
持氏ニ至ルニテ。上叔輔佐ノ勢ヲカリテ。威ヲ關東ニ
振ヘリ。同日ニ關東白旗ノ下ニ其家ノ名ヲ傳ヘリ。
十九年五月。義持大將ヲ辞ス。八月。主上位ヲ躬

仁親王ニ讓ル。年号即位ノ初。永徳ヲ不改コト一
年。其次ニ至徳三年。嘉慶二年。康應一年。
明德四年。應永十九年。合テ在位三十年。

百二代

補光院 諱躬仁。後ニ實仁ト改。後小松院ノ子ナリ。
母ハ光範門院日野贈左大臣藤原資國カ娘ナリ。
應永十九年八月。受禪。年十二。一條經教関白ナリ。
後小松上皇院中ニテ。政務ヲキ、タニス。將軍源義持
院ノ執事ニ任シ。兵仗宣下セラレ。十月。義持淳和
院學兩院別當源氏ノ長者ニ補セラレ。細川右京大
夫滿元管領ニ任ス。

二十一年六月。義持八幡參詣月卿雲客扈從

二十一年十二月即位ノ禮行ル 同月九條大納言滿教右府ニ任ス

二十二年七月義持日吉參詣 八月春日參詣廣橋大納言兼宣并雲客數輩扈從 九月八幡參籠

二十三年十月大納言源義嗣野心ヲ弁レハカム事アラハレ剃髮ノ逃亡 今年鎌倉上校禪秀其職ヲ辞ス

持氏山内ノ上杉安房守憲基ヲレテ禪秀ニ代テ事ヲ行レム 十月禪秀謀叛持氏ノ叔父滿隆ト持氏

ノ曾持仲トヲ取立テ持氏憲基ヲ攻テ合戰持氏敗テ駿河へ逃來テ今川泰範ヲタノミ京都へ訴テ憲基

ハ越後へ逃行テ兵ヲアツム。禪秀權ヲ振テ持仲ヲ鎌倉ノ主トス。禪秀乱トハ是ナリ義持援兵ヲ發セシ

二十四年正月持氏京都ノ加勢ヲ得テ憲基ト謀レ合テ鎌倉ヲ攻破ル禪秀戰敗テ自害ス滿隆持

仲モ自害ス其黨類皆亡ス持氏鎌倉へ歸座レ憲基執事タルコトモトメコトニ持氏ノ持ノ字ハ義持ヨリ授ラ

ルヨレミアルニヨリテ義持ト持氏トハ相睦シ 十二月義持ノ嫡男義量十一歳ニテ元服ス義持加

冠タリ正五位下ニ叙レ右中將ニ任ス即昇殿參内ス 二十五年正月前大納言源義嗣相國寺林光院ニ

害セラル年二十五圓修院ト号ス 五月前大納言源滿詮卒ス義持ノ叔父ナリ左大臣ヲ贈ラル

十一月一條經嗣薨ス歳六十一成恩寺ト号ス 十二月今山川公行左府ヲ辞ス九條右府滿教左

府ニ轉シ。關白トシテ九德大寺大納言公俊右府ニ任ス
二十六年二月中丁、釋奠行ル。文武天皇大寶年中
ヨリ。此比ニテ猶ヲコタルコトナレ。七月大明ノ使者
呂淵來ル。九月關白滿教左府ヲ辞シ。將軍義持
内府ヲ辞ス。十二月右府公俊左ニ轉ス。二條大納
言持基右府ニ任シ。西園寺大納言實永内府ニ任ス。
二十七年正月德大寺左府公俊太政大臣ニ任ス。
二條右府持基左府ニ任ス。西園寺内府實永右府
ニ任ス。二條大納言公光内府ニ任ス。公光左大將ヲ
兼。二條大納言兼良右大將ヲ兼ラル。兼良公經嗣ノ
子今歲十九。三月公俊太政大臣ヲ辞ス。
九月義持不例伊勢并諸社へ奉幣。太山府君ノ祭

行ル。後經朝臣并醫師高天讚岐國へ流サレ。陰陽助
定棟刀呂捕シテ禁獄セラル。此等ヨリ狐ヲシカフテ義持ヲ
ノコフ由風聞スルヌナリ。一月義持病氣平復ス。華八
同月廣橋大納言兼宣裏松參議義資日野參議有
光勸修寺左中辨經興等室町殿へ參候。皆故ナク追
籠ラレテ執事居。年月ヲ歷テ赦免セラル。十二月西
園寺實永右府ヲ辞ス。二條公光右府ニ轉シ。大炊御門
大納言宗氏内府ニ任ス。
二十八年正月元日義持參内院參。同月鎌倉左
兵衛督持氏使者木戸駿河守上洛シ。持氏三位昇
進ヲ謝シ。義持不例伏復ヲ賀ス。四月大炊御門
内府宗氏薨ス。七月二條大納言兼良内府ニ任ス。

同月細川右京大夫滿元管領ヲ辞ス 八月畠山
左衛門督滿家入道道端管領ニ再任ス

二十九年正月義持青蓮院門跡義圓ノ坊へ赴ク義
圓公義持ノ弟ナリ此比天台座主ニテ大僧正ニ任シ在任
ノ宣旨ヲ蒙レリ義滿以來世上無為洛中靜ナルユヘ

義持所々遊覽管領畠山滿家斯波右兵衛督義
淳細川右京大夫滿元并諸大名ノ宅へモ赴テ遊慰

セラル攝家門跡并西園寺柳原日野等ノ家へモ渡御
アリ是ヲ御成ト云リ 四月義持院參依樂アリ

五月義持等持寺ニテ鹿苑院ノ年忌ヲ修ス法華八
講アリ関白九條滿教等公卿雲客出座 八月義

持ノ御臺伊勢參宮 九月後小松上皇八幡參
請義持扈從 同月義持伊勢參宮 十一月義量

初テ八幡參請公家武家皆賀ス 十二月義持等
持寺ニテ寶篋院ノ年忌ヲ修シ法華八講アリ公

卿并雲客出座四箇大寺皆參ル
三十年二月義持征夷大將軍ヲ義量ニ讓ル時十七

歳 三月義持并御臺伊勢參宮 四月義持等持
寺ニテ浴飾法名道詮道号八頭山時三十八歳

七月朝鮮ヨリ使僧來テ一切經ヲ贈ル 八月二條
公光右府ニ任ス

三十一年正月義量從四位下ニ叙ス 二月義持鎌

倉持氏ト不快ノ事アリ之ガ和睦セラル 四月南帝

後龜山院嵯峨ニテ崩ス 十月義量參議ニ任ス

同月後小松上皇相國寺御幸。義量扈從せらる。義持
ステニ治世ヲ義量ニ讓テ管領畠山滿家輔佐ス。義
持ハ洛邊處々遊覽。今年九條滿教閑白ヲ辭シテ。
二條左府持基關白ニ任シ。一條内府兼良右府ニ任ス。
洞院大納言滿季内府ニ任ス。

三十二年正月。義量正四位下ニ叙ス。二月十六日。
上皇ノ一ノ宮薨。同月二十七日。征夷大將軍參議
中將源義量逝去。年十九。長得院ト号ス。在職ワツカ
ニ三年。四月。義量近習ノ士。義持ニ謁。管領畠山
滿家并伊勢因幡入道昭心。申次之。伊勢守ハ平氏ノ
餘流ナリ。室町家代々ノ近習ニテ。管領事ヲ奉行
スル者也。同月。後圓融院三十三回忌。仙洞ニテ法

華八講ヲ修セラル

三十三年八月。洞院滿秀内府ヲ辞ス。近衛大納言
所嗣内府ニ任ス。

三十四年十月。赤松左京太夫滿祐。赤松越後守持
貞。所領相論ス。尊氏ノ時ヨリ。赤松一族。攝津播磨
備前義作因幡五箇國ヲ領セリ。滿祐ハ則祐ガ嫡孫
ナリ。持貞ハ則祐ガ兄。貞範ガ孫ナレトモ。嫡孫ニハアラス
。庶流ナリ。然レトモ。義持ノ寵臣タルユヘ。三箇國内
三箇國ヲ持貞ニ賜ル。滿祐憤テ。京都ノ巴カ館ニ火ヲ
放テ。播磨へ下ル。義持怒テ。細川持元。山名滿熙ヲ
レテ。滿祐ヲ討シス。然レトモ。持貞驕奢無礼ノ者ナレユ
ヘ。諸大名皆コレヲ惡テ。滿祐ト相談シ。持貞ガ惡ク

詔(イ)六 十二月持貞自害ノ満祐ハ赦免セラレ
歸洛

正長元年正月十八日、前征夷大將軍從一位内大臣原義持薨ス。年四十二。太政大臣ヲ贈ラレ勝定院ト号ス。應永六年ヨリ將軍ニ任レ。同十五年ヨリ治世。今年ニテ二十一年ニ及リ義量早世ニヨリテ。嗣ナシ。鎌倉ノ持氏上洛ノ志アレモカナク。義持ノ弟義嗣ノ外一人ハ仁和寺御室法皇一人ハ青蓮院准后義圓一人ハ梶井門跡義兼一人ハ大覺寺門跡義昭ト云。義持病中ニ管領畠山左衛門督満家入道道端石清水八幡宮ヲ闡ヲ取テ。青蓮院殿ヲ義持ノ繼嗣ニ定ム。二月十二日青蓮院門跡

義圓遷俗シ室町殿へ入テ。義宣ト号ス。同日從五位下ニ叙シ。左馬頭ニ任セラル時ニ三十五歳ナリ

同日准大臣日野資景國薨ス。主上ノ外祖ナリ

四月武家評定始。開始兼馬始等ナリ。義宣從四位下ニ叙ス。同日日野儀同ニ司資教薨ス。年七十

三資國カ兄弟ナリ。五月鷹司前右府冬家薨ス。

六月德大寺前相國公俊薨ス。年五十八。七月二十日主上崩ス。年二十七。此代即位ノ後改元ナシ。應永二十年ヨリ。二十四年ニテ十五年。正長一年ヲ加テ。合テ在位十六年。此帝魔法ヲ修シ常ニ繫齊セラレ。ニヨリテ皇嗣ナシト云傳タリ。

